加島あきら纂譯

聖金口の生涯と其事業

正教會編輯局發行

269
10

020899-000-2

特18-566

聖金口の生涯と其事業

ロプヒン/著

M45

ABI-0734

甫はじめて生れし赤子の
如く純真なる靈に智の
乳を慕ひ之に由りて
救ひに長ぜん爲なり

（ルカ傳第二ノ二）

特 18
566

加島あきら編

聖金口の生涯と其事業 完

東京 正教會編輯局發行

明治
45. 2. 9
内交

聖金口約翰

凡例

▲本書は露國彼得斯堡神科大學飜譯及發行に係る「聖金口全集」第一卷の卷頭に附せられたる緒言及ロプヒン氏の執筆になる金口傳を飜譯したる者也

▲本書は評傳としては事實極めて尠しと雖一種の教訓書としては好箇の書なり吾人は此意味に於て讀者の一讀を希はんと欲す

▲本書を讀了せられたる讀者は吾人が讀者の爲に特に卷尾に附したる金口著作邦文譯目錄により各々好まるゝ教訓を其内に需めて必ず金口の實教訓に浴せられん事を望む

▲本書中譯語及文意の不適當なる處多かるべし吾人は再版の時必ず之が改訂を怠らざる可ければ讀者諸君幸に諒とせよ

目　次

▲緒　言……一
▲金口の家庭……四
▲賢母より受けたる感化……六
▲少年時代と其教育……八
▲猛烈なる異教の迫害……九
▲金口約翰蹶起の動機……一五
▲ユリアンの悶死と基督教の復興……一六
▲青年時代の約翰……一八
▲辯護士としての約翰……二三
▲約翰修道を決心す……二七

千九百〇十二年一月

江戸川倫の僑居に於て

譯者しるす

▲慈母約翰の修道士たるを悲む……二八
▲誦經者としての約翰……三一
▲慈母を亡ひて約翰苦行に就く……三二
▲約翰深く曠野に隱る……三四
▲嚴格なる修道院の生活……三七
▲苦行排斥の風潮……三九
▲苦行生活の擁護者としての約翰……四〇
▲約翰補祭となる……四二
▲補祭としての約翰……四三
▲筆に依れる約翰の傳道……四六
▲約翰補祭に選叙せらる……四八
▲社會の不德と敎會の混亂……四八

▲一愚婦「金口」の名を捧ぐ……五二
▲先師の名を高うしたる約翰……六〇
▲安市に於ける暴徒の騷擾……六二
▲金口より迸る譴責と慰藉の辭……六六
▲老主敎衷訴の途に上る……七〇
▲修道士等特赦を哀願す……七三
▲特赦請願の成功……七七
▲社會に對する敎會の勝利……八一
▲周到なる聖金口の注意……八五
▲美はしき牧者被牧者の關係……八七
▲聖約翰聽衆の不謹愼を戒飾す……九一
▲貧者の父としての金口……九六

▲平和を宣傳する天使……一〇三
▲聖書註釋者としての金口……一〇四
▲聖金口都に召さる……一〇七
▲大主教としての聖金口……一〇九
▲君府に於ける大主教座……一一三
▲君府に於ける教界の混亂……一一四
▲善教師たる聖金口……一一七
▲聖金口驕奢の風俗を嚴責す……一二三
▲教職腐敗の原因……一二六
▲女修道院の建設……一二八
▲異教禁滅の運動……一三一
▲蠻民間に於ける傳教……一三七

▲君府に於ける天變地妖……一四〇
▲教會特權の擁護……一四二
▲金口の聖德叛軍を歸服せしむ……一四六
▲聖金口群小の怨府となる……一四九
▲金口の嚴正貴族の怒を買ふ……一五三
▲金口排斥の運動起る……一五五
▲金口異端者を以て目せらる……一六二
▲金口の敵者の惡計……一六六
▲金口孤島に放たる……一六九
▲金口再び都に迎へらる……一七三
▲金口と皇后と再度の衝突……一七七
▲金口に對する再度の迫害……一八一

▲約翰教徒の窘逐……一八六
▲幽閉中の聖金口……一八七
▲皇后再び約翰の首級を索む……一八八
▲君府に於ける神の義罰……一九一
▲謫地に於ける聖金口……一九四
▲約翰更に流竄地を變せらる……一九七
▲金口の永眠……一九九
▲金口遺骸の遷移……二〇一
附錄
▲金口の著作が基督教文壇に於ける地位と各國語に飜譯せられし經路……二〇五
以上

聖金口の生涯と其事業

加島あきら譯

▲緒言

辯舌の爽なりし事より「金口」の稱を得たる聖約翰は、基督降生後四世代に於て聖なる全教會の靈的蒼穹を飾りたる大群星の一なり、當代の教會は諸種の關係上最も注目すべきものにして、當時聖なる教會は諸惡の力が教會を破壞せんとする暴影を地に止むるなからしめんが爲に、土を卷いて攻擊し來れる恐るべき窘逐時代を既に經過し了り、漸く其力に勝ちて、羅馬帝位に始めて聖母の名譽の爲に捧物を獻ずる所の教會の愛兒を卽位せしめし時代なりき。

斯くの如く教會は外部に於て勝利を得たりと雖、異教が有する所の惰

力との內部の戰爭は其後も絕えず、既に滅亡期に瀕せる事を自覺せし異敎は、屑一屑の死力を振つて基督敎を陰に陽に破壞せんと力め、且つ多數の愚民は尙ほ蒙昧なる異敎の敎に膠着せるが故に、異敎の勢力も亦侮るべからざるものあり、之に加ふるに又多くの僞敎師、民間にありて、人民が基督敎の赫耀たる眞理を認めて、其嚮の迷へる風俗と慣例を脫出せんと努むる爲に其心の煩悶せるを利とし、彼等の間に隱家を求めて他日其頭角を現はして一擧に基督敎の眞理を排斥せんとし、異端と邪敎の種子を人民の間に蒔きたり、此異端中最も恐るべき者はアリイ敎にして、此敎は忽ち東方諸國に蔓延し、遂には君斯坦丁堡の市中に侵入し來りて、其勢を縱にし同地の聖堂は殆ど悉くアリイの演神的の讃美歌を以て穢されざるものなきに至り、爲に正敎徒は身を一の假會堂に寄せて纔に其處に信仰を繼續したる程なりき。然りと雖、敎會の建

立者にして又其主宰たる主が宜ひたる「地獄の門之に勝つ能はず」との約束は空しからず、邪なる異端の嵐の力が極點に達して今や狂亂せる怒濤敎會を水底に呑み了らんとする刹那に當りて最も熟練なる舵手忽然として敎會內に輩出し非凡なる才智を廻らして、彼等に任せられたる船を縱橫に操縱し、戰慄すべき暗礁と怒濤を切り貫けて穩かなる港に到着せしめ、其處にある正敎の動かざる眞理の錨に船を繫留せしめたり。斯かる熟達なる舵手は其數少からずと雖、其內に明星の如く敎會史上に燦爛たるは、聖大アプナシイ、大ワシリイ、神學者グリゴリイ及び金口イオアンの四人にして、彼等の名は實に靈界の偉業を常に代表し、其非凡なる才智は今日迄彼等を全世界に正敎の光を輝かしたる世界の敎師として崇拜置かざる所たり、就中特に聖金口は、其才智の豐富にして、多樣なるを以て他者を抽でたる人にして、彼の言は全世界を隈

なく輝し、靈に觸れし彼の説教は、人の衷心を燒き盡すと共に、又他方彼の苦難と誘惑に勝ちたる生涯の事跡は神靈上の戰場に在て、罪惡、幽暗及び迷妄の物凄き力と戰ひつゝある基督教の軍士の爲に好箇の訓戒と奬勵たるを失はず。

▲聖金口の家庭

聖金口の生れたる年代に就ては未だ確乎たる説なし、多くの歴史家は各々其説く所を異にし其間往々十年の差あるものありと雖、想ふに聖金口は基督降生後三百四十七年頃アンチオヒヤに於て生れたりとの説は最も當を得たるものゝ如し、彼の兩親は當時知名の一素封家にして、父セクンドは近衛將軍の最高職を務め、母アンフウザは當時の女流間に在りて最も學識あると同時に、妻として母として稀に見る模範的の

婦人なりき、彼等夫妻は又當時の如き過渡時代に於ては逃れ難き名ばかりの基督教徒に非ず、眞に心より教會に服從したる敬虔なる教徒にして、イオアンの伯母に當るセクンドの姉妹なる人も亦アンチオヒヤの教會に於て「女役事」を務めたる人なり、聖金口は實に斯くの如く麗しく斯くの如く敬虔なる家庭の内に其呱々の聲を揚げたる幸運兒なり、セクンド及ひアンフウザは年尚若き人にして、彼等の間には二人の子あり、一は二歳の女兒にして他は新たに誕生したる嬰兒約翰なり。此二女兒こそは彼等二人の身に取りては如何なる寶にも換へ難き喜悅と慰藉なりき。然るに其後間もなく此家庭を襲ひたる不幸は彼等をして斯る幸福に長く安からしめず、前途尚ほ多望なる此家の主人セクンドは花の如き年齡若き妻と二人の愛子を遺して遽然他界の人となりたり。芳紀僅かに二十歳なる若き母の悲歎や如何計ならん。彼女は豐かな

る財產を有するが故に生活上に於ては何等の慮なかりしとはいへ、精神上の苦悶に至りては其生活の豐かなりし丈其丈堪へ難く、年若うして未だ世路に熟達せざる彼女は、其富を利用せんとして集り來る多くの僞友の種々なる誘惑の燒點となりたり。

▲賢母より受けたる感化

若し彼女にして普通一般の婦人ならんには、斯る境遇に會し忽ちにして其の誘惑に傾くか、然らずんば其の犧牲たるべきは、蓋し疑ふべからざることなれ共、己が眞の使命と其價値を知れる女丈夫アンフウザは此等誘惑を斷乎として打ち斥け、超然其上に己が身を置きたり。しかのみならず基督教徒としての彼女は、又、己が不幸を夫より來れる試練なりとなし、再び他夫の許に嫁する望を全く絶ちて、己を孤兒となりし子

供の爲に捨て、母としての義務を盡すべく深く決心したり。斯くて彼女は當時の異教徒が驚愕したる程の堅忍不拔の精神を以て其志を貫徹し、彼女が母として其一身を子供の爲に獻げたる事は彼の有名なる辯論家リワニイをして不覺嗚呼基督教徒中には如何なる婦人の顯るゝや計り難きことなり。」と叫ばしめたる程なり。實に彼女の決心は其幼き女兒の死に因りても搖ぐことなく、アンフウザは殘れる其獨一の愛子と共に世を送りて、己が愛と希望とを此一人の子の上に集めたり。彼女は社會の上流に位し又自ら學識ある婦人なりしを以て、其子金口に當時に於ける最高の教育を授くるに躊躇せざりき。世俗の快樂の巷を離れて家庭にのみ籠りたる彼女は、先づ自ら其子に教育の初歩を授けたりしかば、金口約翰は其の愛する母の口よりして讀書と習字とを先づ學びたり。彼が最初に習ひたる綴音と讀書の言葉はアンフウザが寡居

の時に於て常に愛誦して自らを慰めたる聖書の句たりしは疑ひなき所にして、此時に受けたる日課は一生約翰の心に深く銘し、彼が後年絶えず己を神の言を以て養ひ、其の解釋を以て終生の主要なる目的としたるは疑ひなく皆此敬虔なる母の感化に外ならず。

▲少年時代と其教育

斯くの如くにして彼の幼年時代は過ぎ今や約翰は可憐なる少年となり、益々進んで教育を授くべきの時となりしかば、アンフウザは彼の教育の爲には毫も其家財の費ゆるを惜まざりき。少年時代にありてイオアンは其教育を家庭教師に就きて受けたりしや將又基督教の一學校に於て受けたりしやは今日に於て詳かならずと雖、當時のアンチオヒヤが諸種の學術の淵叢たりしことはシリヤのアセンスとの稱を受け

居たる程なれば、其所に傲慢なる辯を振ひ、又は茫として捕捉し難き哲學を說く幾多の教授を教師とする異教の學校と共に神の言を教授し其を解釋し教訓する基督教の學校ありしは明なる事なれば、聖イオアンが此間に介在して兎に角如何なる道によりてか讀書の出來得る丈の教育を受くるは强ち難きことにあらず。然れ共此教育は要するに神が其選べる者をして將來の大なる職に備へ、其れに異教の教の虛僞なる事と、基督教の教の偉大にして神聖なる事を曉らしむる點の教育には非ずして、只其教育の一端のみに過ぎざりき。

▲猛烈なる異教の迫害

約翰の齡漸く長じ十四五歲に達し、彼が其四周の種々なる事件と顯象とを意識するに至れる時代は異教が皇帝にして背教者なるユリアン

を頭に戴き、基督教と奮戰すべく其最後の奮勇を奮ひ來りたる時なりき。其首長ユリアンは帝位を襲ふと共に其敬虔の虛僞なる假面を擲ち久しく彼が其胸に秘めたる基督教に對する憎惡の念を表に顯はして公々然自ら基督教の敵なりと揚言し到る所に基督教を壓して、己に衰運に傾きたる異教を盛り返さんと圖れり。當時アンチオヒヤは最初に「クリスチアニン」なる名を自稱へ(使徒行實一一ノ二六)出し其著名の學者と信仰堅固なる信者を有する基督教の震源地なりしかばユリアンは先づ最初に此憎むべき基督教徒の居城を滅さんとし、之が爲に有ゆる手段を講じたり。然れ共彼も素と遠見の士にして、歷史上無智なる迫害が以て教を滅ぼす能はず、其に殉じたる致命者の血が却つて收穫に富める種子を蒔くに均しきものなるを知るが故に、彼は己に先ちて帝位に上りたる諸皇帝に倣ひて彼等が行ひたる如き迫害を爲さず、他の

方法を採らんとし、一方にありて積極的に萎靡せし異教徒の精神を興奮すると共に、他方には消極的に皇帝の權力を以て出來得る限りの方法を凡て遺漏なく講じ、有ゆる壓制と罵詈と愚弄とを基督教の上に加へたり。皇帝ユリアンのアンチオヒヤに赴くや必ず先づ其市外なる「ダフナ」に車を馳りて其處に祭られたる藝術の神「アポルロ」の著名なる神社に詣づるを常とせり。此神社及び其周圍なる聖林は嘗つて異教徒が祭典と祈禱を常に行ひたる所なり。ユリアンが初に其處を訪ふや其荒れ果てたる樣に、痛く驚きたり。彼が初に其社に赴きたる時社殿には何等の捧物の蓄へもなく、彼を不意に迎へたる神官は彼が爲に己の家に飼養せる鵞鳥を屠りて纔に社前の獻物に代へたる程なりき、斯くの如く「アポルロ」の神社の哀れに寂寥なるに反し、其に隣れる聖ワビラの不朽體を納めたる基督教の會堂は、常に熱心なる信者を以て充滿し、其讃

美歌の聲は遠く響き亙りしかば、其狀を親しく見たるユリアンは遂に忍び難くなり、命じて基督教の會堂を閉鎖さしめ不朽體を其の堂より他に運ばしめたり。然りと雖基督教徒の熱心は此無法なる命令に少しも壓せらるゝ事なく、彼等は不朽體を他處に移すが爲に嚴なる祭を擧げしが、此時詩篇の「偶像を拜み、己が像を讃むる者は耻辱を受けん」との句を歌ひつゝ行ひたる遷移式は實にアンチオヒヤ全市と其近郊を動搖めかしたれば、之によりてユリアンは基督教徒の數の少なからぬ事と彼等が其教に忠實なることとを明かに覺りたり。茲に於てかユリアンは此時日常彼が持したるてふ所謂哲學者の不動の精神と他教に對する虚僞なる「容認」の心を捨て忽ち多くの基督教徒を捕へて獄に投じ又或者を拷問にさへ處したり、天いかでか斯くの如き行を默すべき其時ユリアンが種々配慮したる「アポルロ」の神社は忽ち落雷の爲に紛碎

せられ殘る所なく灰燼と化し了りたり。其事を見たるユリアンの憤怒は實に悽じく彼は基督教徒に「アポルロ」の神社に放火したりと認ひ命じてアンチオヒヤに在る重なる基督教徒の會堂を封せしめたり。且つ其時異教の官吏に聖堂の聖器物を渡すことを肯せざりし高齢の司祭聖フエオドリトは爲に死刑に處せられたり。彼の暴戾は其に止まらず彼が偶ま路を通行するに當り、或家よりして詩篇の「神は興き、其仇は散るべし」との句を歌へる聲の漏れしを聞き其家の主婦なる寡を捕へて輒難し、又或時イウベンチン及びマクシミンと稱ふ二人の若き近衛士官が友人と會し互に相談ふ中に基督教徒に對する此頃の所置の餘りに酷薄なることを難じたるにユリアンは此事を耳にし直に彼青年士官を捕へて獄に投じ、彼等が異教の教に歸依することを肯せざるや、ユリアンは命じて彼等を其夜獄中に於て斬首せしめたり。此の如くユリ

アンは己が憤怒に任せて基督教徒を迫害したるも、素より彼は能く斯る迫害の徒らに基督教徒の勇氣を惹き起すの外に其教を芟滅せしむる點に於て何等の効なきを知るが故彼は又文學上よりも其督教を迫害することを考へ、先づ自ら筆を執て基督教を嘲罵したる一文を草し主イエス、ハリストスの神性と奇跡を排斥したる論文を上梓して基督教徒の無智にして迷信に富める愚昧なる狂信者なるを説き、其と同時に基督教徒の教育上に壓制を加へ學校に於て彼等を教育するを禁じ彼等の開ける學校に向つては閉鎖を命じ且つ基督教徒に特に重稅を課し會堂の財物は悉く沒收し、主教と役者は放逐し、基督教を奉ずる軍人に對しては恩賞を與へず、縣令には基督教を嫌嫉する人士をのみ任命して彼等が有ゆる惡しき手段を弄して基督教を芟滅せんと計れるに對し默して何等咎むることを爲さず、彼等縣令の内若し其縣下に

行はるゝ基督教徒に對する迫害に向かつて注意を拂ふ者あればユリアンは激怒し『十人のガレリヤ人が一人の異教人の手に依りて仆るとは何等の不幸にも非ず』と叫び、斯くて彼は遂に基督教に最大の痛傷を與ふると共に主基督が爲したる耶路撒冷城の破壞の豫言を虛言に了らしむべく、其市に猶太人の會堂の再建を志するに到れり。

▲金口約翰蹶起の動機

當時聖約翰は尙年少かりしも同年の朋友と嬉戯するを避け、獨り家に籠りて種々なる想像に耽り、聖書及び靈益ある書籍を讀むことを特に好みたり彼は弱年なりしとは云へ、彼の眼前に行はるゝ斯る事實を親しく見ると共に、其敬虔なる母が基督教迫害に少なからず心を痛め居れるを思ひ遂に默すこと出來ず、彼は奮然として立ちて母の憂愁と煩

問とを先づ己に分ち倚進んで基督教徒の爲す所の事業に干與したり此事は後年彼が主基督の爲に致命したる勇敢の軍士イウベンチン及びマクシミンの墓側に於て述べたる讃美の說教に由りて明かに認め得ることにして、一度其說教を讀む者は誰しも約翰が嘗て此致命者の埋葬に列して多くの基督教徒と共に、首なき屍に熱き涙を灑ぎたることあるに想ひ至らざる者恐らくあらざるべし。

聖致命者イウベンチン及びマクシミンを讃美したる說教は金口全集中にあり。

▲ユリアンの悶死と基督教の復興

ユリアンの暴戾は彼がペルシヤに行軍する際戰死せし爲終局を告げたり。ユリアンは其死するに際し、重傷を負ひながら倚基督教に對する

無智なる迫害を改悟せず、淋漓として凝れる血の塗れし砂土を掴み太陽に擲ち氣息奄々として「オヽ汝ガレリヤ人よ、汝は我に勝てり。」と叫びたり。彼の後に帝位を繼ぎたるイオビアンは其在位甚だ短きに係らず先帝が基督教に與へたる害毒を除かんと計り、先づ軍旗に基督の名を再び記し、次に會堂の課稅を廢し、三には追放に處せられたる主教神品を悉く招還したり。彼の後繼者なるワレンチニアンも矢張基督教に對しては好意を有せし皇帝にして其在位中ワレントを補助者とし、之を東羅馬の副王として政治を委ねたるが爲に非常の失態を招きたりとは云へ確に彼は前の背教者たる皇帝が基督教に負せし損傷を平穩せしめんとし少なからず此爲に盡瘁したる人なりし事は明にして主日を祭ることと及び種々なる魔術と異教人が一種の口實として有ゆる醜態を演じ人民の間に基督教に對する嫌避の念を養ふ原因となる夜間

の祭典とを禁止したること、等は皆彼の命令に出でしものなり。

▲青年時代の約翰

此平和なる時に當りて約翰の年齢は漸く青年期に達し、ワレンチニアンが帝位に上りたる時には實に彼は心身共に麗しく咲き競ひたる十八歳の一青年なりき。多年數へ盡されぬ迫害と危難とを排して寶物の如く今日迄保護し來りたる愛子約翰の才氣溢れし大人姿を眺めたる母アンフウザの喜や如何計ならん。彼女は尙も愛子約翰をして其才と其位置に應じて社會に立たしむることを己が義務なりとし、生活場裡に馳騁する時に萬事を巧に操縱し行き得るが爲には、必ず或一科の學術を專攻し置くの要あるを思ひアンフウザは約翰に「雄辯學」と「形而上學」に對する傾向あるを察して遂に彼を當時有名なる雄辯學の學者リ

ワニイの設立せる學校に委ねたり。リワニイは異教の詭辯學者にしてユリアンの朝に於て彼を補佐したる人の一人なり、彼はユリアンと均しく異教の教を頑く奉じ、其復興を新哲學によりて企てたる人なりと雖、彼は基督教に對しては一種暇下的見解を有し、其に對する偏狹なる嫉惡を有せず、常に基督教徒が木工の子を信ずる信仰を奇なりとし、其を嘲笑し居たり。一日リワニイは一人の敬虔にして既に高齢なる基督教の教師が監督せるアンチオヒヤ市の基督教主義の學校を參觀したることありしが、其時彼は其長に向つて諷刺的に「此頃木工の子は何を爲せるや」との問を發したり。學校長は彼の此揶揄的質問に對し至と眞面目に答へて曰く「卿が輕蔑して木工の子と稱する者は、實に天地の主にして、又其造物主なり。彼は今葬式を行ふ道を作り居れり」と然るに此事のありて後幾何もなきに不意にユリアンの死去せる報に接したり

しかばリワニイは曩に基督教の教師の答へたる言葉を憶ひ起し、少なからず其を奇としたり。其は兎に角彼リワニイは基督教に對し決して妄狂にして無智なる嫌惡の情を有する者には非ず。されば雄辯學を研鑽せんが爲に基督教徒の子弟を彼の門に入るゝも毫も危險とする所なかりしかば、聖大ワシリイの如き矢張彼の門下に學びて、終生彼を師とし常に彼と文通を絶たざりき。斯る有樣なるを以て、幼時より敬虔な る母の膝下に生立ち、今や其齢既に己が信仰の防禦の爲に、心靈の武器を執つて起ち得る一個の基督教軍士たり得し彼約翰も決してリワニイより惡しき感化を受る事なく、彼は其生來の學術に對する熱心を以て高尚なる學を研鑽し、天賦の才能を發揮して屢々教師をして其進歩に舌を卷かしめたり。リワニイは己が門下に斯くの如き非凡の雄辯家の輩出して爲に己が光輝を薄からしめんとするに對して些少の惑な

きこと能はざりしと雖、異教の遺骸を復活せしめんと考へつゝあるリワニイに取りて特に心の安からざりしは、秀才約翰が基督教徒にして且つ將來其教の大宣教師たり、大表信者たるべく志しつゝある事なりき。老練なる詭辯家の身に取りては其門下の凡てが己と同主義に傾かんことの望ましきは自然の數にして、此希望の特に其愛する徒弟に強きを蓋し止むを得ざることなりと雖、此時に在りては約翰は既に自ら世に處する方針を定め、一身を主の爲に捧ぐることに決心し居たるが故に、リワニイの約翰に對する嘱望も全く水泡に歸したり。年老いたる詭辯家リワニイの病の危篤なりし時、彼の許に來りたる或客が何人を己が後繼者たらしむるやと彼に問ひたるに、彼は深き悲嘆に暮れつゝ「若し基督教徒にして約翰を我門下より奪ひ去らざりしならんには其を後繼者とすべきに」と嘆じたりと云へり。

約翰は雄辯學の外に亦アンチオヒヤに於て名ありし哲學者アンドラガヒイに就きて哲學をも修めたり。當時哲學は此學の特性たる古雅性を全く失ひて、徒に其形式を追ひ、思想の淺薄を蔽ふに雲煙の如く捕促すべからず。且つ極めて傲慢なる詭辯を弄したる者たりしとは、雖、其學の研究に從事する學者が少くとも社會の哲學に對する篤學の風を養生したるは否定すべからざる事實にして、且つ彼等の研究が、若し尙其歩を進て人の心靈界の法則に觸れたらんには彼等の弟子の思想を外界の現象より轉じて心靈界の奥密なる點に向かはしむることに於ても又必ずや功績ありしとなるべし。哲學者なるアンドラガヒイは確かに此種の學者の内に當然に加へらるべき人にして彼約翰が後年に至りて人の心靈の堂奥なる祕鑰を洞察する驚くべき才能を發揮し、而して其傳道と其論文に光彩を添へたる所以のものは、勿論其生來の

聰明に基因するあるは言ふを俟たざる所なりと雖其事の又少なからず其師とせる人に負ふは蓋疑ふべからざることなり。

▲辯護士としての約翰

約翰は斯くの如くにして其學業を卒り、今や其絢爛たる才氣と多年蘊蓄せる智識とを以て世路の第一歩に進みぬ。貴族にして才智ある彼の眼前には廣茫たる舞臺は、濶け、彼の地位は國家の主要なる職に就く順境に在り。然りと雖、其少し以前に行はれし帝位の類々たる交迭は行政機關の上に影響を來し官海に於ける地位の必ずしも鞏固ならざることを證明せしが故に、約翰は官海に身を置くを好まずして、智識ある當時の青年が社會の上流に進むが爲に常に辿りし比較的自由なる職即ち辯護士たるべきことを期せり。此職たるや實に當時の貴族の子弟が

社會に出づる當初に於て必ず從事したる業務にして、聖大ワシリイ、アンブロシイ、スリピチイ、セウエルの如き皆嘗ては一度此職を通過し來りたる人なり。辯護士の職は今日迄敬虔なる慈母の膝下にありて、平和なる家庭に生い立ちし約翰を忽ち世路に吹き荒ぶ暴風雨の域内に捲き込み了り、彼をして今迄毫も知る所なかりし、世の日常の現象たる不義懲戒、凌辱、壓制、爭鬪、譎詐、流涕等の有ゆる諸罪惡に近づかしめたり。斯くの如き生活の急激なる變化は、彼の純潔なる精神に一種世に對する嫌惡の情を生せしめたりとは雖、確かに彼をして社會の裏面に虛僞と僞善の假面を被りて潛在し、獨り法廷に其飾なき醜體を現はす所の不義及び罪惡を悉く知らしめたると同時に、又此法庭に於ける彼の勤務は彼をして後年に至り、世の罪惡を描寫するに少しも假借する所なく其醜態の有の儘を以てするが如き者たらしめたり。辯護士の職は又約

約をして公開演說に堪能なる者たらしめ、其進歩は實に彼の老師リワニイをさへ驚愕せしめたる程なりき。彼の能辯なることは忽にして全市に知れ亙り、爲に彼は少からざる收入を得たると共に又國家の主要なる地位に進む一の逕路を開きたり。蓋當時の政府は各縣を統治する人物を多くは法廷に於て名聲ある辯護士の中より選拔したるが故に約翰も彼が行ける路を漸次辿らんには、副縣知事より縣知事に進み縣知事より、貴族、公使に上り而して國家に於ける主要の人物たると共に、遂には貴顯(Illustirs)の稱をも受くるに至りしは疑なき所なり。且つ夫れ斯の如き人の生活は常に萬事に餘裕ありて快樂多きものなりしが故に、未だ神の廣き世界を窺き見たる許りの青年が其方面に向つて心を傾くるは自然の數にして、敢て怪むべきことに非ず。社界の人々が演劇及び遊戲場に赴き、若しくは快樂と嗜慾に耽くるは、此等の者が彼等の

餘暇を埋むるに最上のものたるが故に、寧ろ止むを得ざるに出づ。されば約翰も嘗ては其若き同僚及び朋友と共に此等の遊戯場に赴きたる事ありと雖、彼の不拔なる天性は其が爲に益々此等の浮薄なる行爲を憎むに到り、恰も辯護士の職の彼をして罪惡の憎むべきことを知らしめたるが如く此等の快樂は彼をして此世の生活の空しきことに思ひ至らしめ、又此不義と嫉惡と諸種の罪惡の充滿せる此世界が約翰の所謂「聖書なる清き源泉を以て己が靈を飲ひ、無垢なる心を以て世の舞臺に進み入る時に當りて、初めて人の心に感じ來る「靈妙なる理想」より遙かに距り居ることを深く悟らしめたり。是が爲に彼の心は斯くの如き試練に久しく堪ふること能はずして神の爲に全く己を捧げ、彼の靈が要求する所の「靈的圓滿」に到達せんが爲に斷然己が好まざる不義と不法の世に對して有する所の繫累を絶つことに決心せしめたり。

彼をして斯くの如き決心をなさしめたるに與りて力ありしは又彼の同年の親しき友なるワシリイにして、約翰

此ワシリイをケサリヤの聖大ワシリイと混せざる樣に注意せざるべからず。蓋し大ワシリイの年は約翰より遙かに上にして、其差は彼が尙ほ小兒なる時既に大ワシリイは國家の主要なる地位に就き居れる程なり

は此少年時代に於ける彼等相互の友誼の厚かりしことを己が著「神品職に就きて」と題する書の冒頭に記載して曰く「余は友誼厚き多くの友人を有し、其中一人は余の最も親しき者にして、彼は常に余と分れざる同行者なりき。余等は同じく學術を同一の教師に就きて修め、均しき嗜好と熱誠を以て雄辯學を研鑽し、同一の學術より生ずる同樣の希望を有せり」と、然れ共其後約翰が社會の俗務に從事するに至りて、其友ワシ

▲約翰修道を決心す

リイは獨り「眞の道」の研究卽ち修道に其身命を捧げたりしかば境遇の差異は彼等の友情をして少しく冷かならしめたるも、ワシリイの善例は彼に偉大の感化を及ぼし、爲に約翰は己が暫時の間耽りたる空想と快樂の益なきを悟れると共に、世の生活の甚だしく變遷するに驚き、斯くの如き世の風浪を逃れんと計り、玆に再びワシリイと接近するに至りぬ。實に彼は約翰に誠實なる友情より出づる善良の感化を與へ、是が爲に約翰をして罪惡と風波の絶えざる浮世に於ける希望を捨てゝ全く己を神と「眞の道」の爲に捧ぐることを心の內に決意せしめたり。

▲慈母約翰の修道士たるを悲む

ワシリイは己が竹馬の友たる約翰の斯くの如き變心を此上なく喜び、共に携へて苦行をして只管道を修むべく已に其準備をなしたり。然る

に此事は計らずも敬虔なるアンフウザの許さゞりし爲に、一時斷念するの止むなきに至れり。蓋し彼女が自ら云へる如く、日々幾千の迫害に遭遇しつゝ其子が青春の客氣ある時代を漸く經過して一個の男子たる齡、卽ち基督の齡に達し今や生活場裡に立ちて、自己の位置と基督敎徒の稱に適ふべき者となりたりしを見て心に慰を得、今や玆に其多年の宿望を遂げたるに雀躍し居れる其母なる者の身に取りては其子が生活場裡を退隱したるさへ心安からざるに、其愛子なる約翰が苦行者たるべく決心せると聞きては、如何計りか悲嘆に暮れたらん。彼女が其希望を全く失ひて忍ぶ能はざりしも蓋無理ならぬとなり。金口の母は熱情を以て涙と共に約翰に彼女を再び孤獨なる寡の境に泣かしめざるとを嘆願したり。此涙を見たる約翰は其決心を翻さゞること能はざりき。卽ち彼は一時己が志望を擲ちて遂に其母の家に留まることとな

りたれども此時代の約翰は已に世の快樂に遠かりて只管靈魂の渴を止むる源泉たる聖書を研めて己が敬虔の德を養ふに務め、ワシリイと共に當時著名なる學者にして祭司たるプラヰアン及びチオドロフが出て聖書を講ずる所の學校に通ひ、而して此敬虔なる教授特にチオドロフは約翰をして全く敬虔の事に從ふ志を定めしめたり。約翰が敬虔なる主教メレンチイに知られたるも恐らく、此學校に在校せし時のことなるべし。主教メレンチイは此才あり智あり、而して亦宗教心に篤き少年に非常なる注意を拂ひ、此を己が膝下に招き其に洗禮を授けたり。時に約翰齡實に二十二歳(三六九年)なり。彼の洗禮が斯くの如く遲かりしは一には當時少年に洗禮を授くるに多く其快樂に耽る客氣の時代を經過して一個の青年たりし時を選びたる習慣の有りしと他方には洗禮を延さゞるべからざる一の事情の教會に存せしに歸因す。蓋し當

時のアンチオヒヤ教會にはアリイ教徒の起せし一の悲むべき內訌あり。此亂は正教徒の間に不和の種子を蒔きて、彼等を苦め、敬虔なる主教メレンチイの如き數度の放逐をさへ受けたり。斯る如き內訌は約翰の幼年なる時代より初まり斷續して殆ど二十有餘年間の長きに亙りたれば正教會に忠實なるアンブウザが害毒ある異端の連累者たるを避けんが爲に其洗禮を延期したるは寧ろ思慮ある事にして、決して咎むべきものに非ず。

▲誦經者としての約翰

然れども其內訌は、今や漸く勢を失ひ爲に主教メレンチイもアンチオヒヤに歸りて己が居に安ずることを得しかば、アンチオヒヤの基督教徒は茲に初めて安き心を以て洗禮を受け得るに至れり。神靈界の爲一

身を擲たんと志せし約翰は洗禮を受くるに及びて、彌々其決心を鞏固にし今は殆ど其全心を悉く其事業に委ねしかば、此敬虔なる行を見たる主教メレンチイは彼を誦經者の職に進め、以て彼が生來有する所の聖書に對する愛を滿足せしめたり。されば翰約は此が練習に熱注せんが爲に寡言者たるべき誓をなし昨日の能辯家及び辯護士は今は全く言語寡き寡言者となり、諸種の虚言及び諧謔を戒めて彼が後年に於て要する所の精神を己が身に貯へたり。

▲慈母を亡ひて約翰苦行に就く

然るに内訌は再びアンチオヒヤの教會に起り、アリイ教徒は皇帝ワレントの助勢を頼みて正教徒を壓迫し主教メレンチイは亦も流竄に處せられて、正教徒特に教役者の位置は實に悲むべきものとなりしが、就

中約翰は此等の悲境に加ふるに母アンプウザの死に會し、彼は波荒く悲み多き諸種の爭亂の充滿せる此世を全く厭ふに到り、遂に此世を捨てゝ曠野に行き其處に苦行をなす決心を愈々深く決せしめたり。彼の友ワシリイは約翰の此決意を聞きて雀躍して喜び、二人は共に彼等の少年時代の友人を可成的多　此誠の道の研鑽に從事せしめんと計り彼等の勸誘を開始したり金口は斯くの如き熱心を以て精神的事業に從事したるが故に從つて友の失敗を見て悲むこと亦人に倍し嘗つて誠の道の研鑽に入り苦行を初めたる一人の友プエオドルが、己が決心を翻してエルヒオナなる一人の女を慕ひ、其爲に苦行を廢して其女を娶らんとしたる時に約翰は悲みに堪へず、己が友の墮落を泣き、世の美の虚きを說きたる流暢にして激烈なる二篇の勸告書をプエオドルの許に寄せて彼が其虚しき思を捨てゝ誠の道に立返ることを促したり

而して約翰が初に物したる教訓たる此二篇の勸告書は非常なる力を有し此書を讀みたるプエオドルは己が意志の薄弱なりしを悔い、其虛しき思を飜して再び苦行の道に復り、終にモプスエストの主教たるに至れり。

「墮落せるプエオドルに書き送れる勸告書」は三百六十九年若しくは三百七十年頃に書されたるものなり

▲約翰深く曠野に隱る

若き約翰及び其友ワシリイは、青年時代の氣鋭なる精神を以て苦行をなし遂には各々互に其を競爭するに至れり。約翰は又其行爲と言葉を以て怠惰者を激勵し、彼等をして、己の肉を殺し、其を靈に服從せしめて以て其苦行を繼續せしめたり。されば彼の非凡なる苦行の德は忽に近

傍の地に知れ亙りて靈と身體の病める者は諸方より彼の許に集り來りて、其醫を彼に求めたり。約翰が靈の惱める者、及び己が罪を悔改めたる者を慰むる事に就きて修道士ヂミトリイ及びステレヒイの許に「悔改のこと」に關したる二篇の教訓を書き送りたるは實に此時のことなり。アンチオヒヤの正教徒は此等の若き修道士の苦行を見て驚き主教會は彼等を教會に密接ならしむることをさへ議決したり。蓋し當時の教會に在りては己を捨てゝ働く所の牧者を特に要せしが故に、主教會は彼等二人を推薦して主教の職に就かしめんことを議したり。斯くの如き若き人を主教に選ぶことは當時の如き波瀾多き時代に於ては甚だ珍しからぬことにして彼等青年にして若し其才智と敬虔に於て主教たるに適する者ならんには直に彼を立てゝ主教となし、其年齡の如きは敢て必然に具體すべき條件には非す。實に金口約翰は今や此大な

る名譽の前に立ち、而して其實現も遠からず。然るに彼が斯くの如き議の己が上に在るを聞きたる時には寧ろ甚しく驚愕せり。彼の心は此が爲に其靜謐を失ひしが故に、彼は己が心を穩かにし、此世の風波の外に立たんが爲に更に曠野の奥に去りたり。されど世は永く彼を其所に安からしめず、彼は其後幾何もなきに主教たるの止むなきに至り、有ゆる方法を講じて其選を逃んと計り、其友ワシリイを其職に推薦して自ら尙深く曠野の内に隱れ了たり。斯くてワシリイは其後豫期せられたる如く實に主教の職に擧げられたるが彼は暫くして其事が己の友の行ひし所なるを知り、痛く悲みたり、約翰が「神品職に關する教訓六篇」と題する有名なる一書を草し、之を其友に寄せ其内に己の行の正しき事と牧師の職の尊きこと及其職の困難なることを記載して友を慰めたるは此時の事なり。此書は今日も靈界の牧師間に一の指南書として重せ

られ眞の牧師たるの勇氣と精力を得んとする者の常に愛讀措く能はざる所なり。ワシリイは此書を讀み其心を安じ最上の牧師たる己が職務の爲に其全身を獻ぐるに至り、三百八十一年にはラファンの主教の資格を以て第二次の全地公會に列席せり。

▲嚴格なる修道院の生活

然るに一方約翰は主教の推擧を避けたる後は、益々嚴格に苦行をなし、一向己が德の向上を計りたり。蓋し此時代の政界は日として雲脚定る所なく、教界はアリイ教徒勢力を擅にしたるが、故に敬虔なる多數の人士は皆此騷擾と風波と災害の充滿せる悲むべき世を厭ひ、此世の諸罪惡の襲はざる美しき自然の内に眞の靜謐を味はんことを熱望したり。されば、アンチオヒヤの近在の山は此等の隱遁者を以て充滿し、其人々

は又自から一の社會を形作りて苦行をなすに至れり。此等の人は常に肉慾と戰ふ基督の眞の軍士にして、夜半より祈禱をなし、其嚴かに歌ふ聖詠の聲は常に曠野及び四方の山を驚しめたり。彼等は夜半の祈禱を終るや、少時休憩したる後再び日出と共に起きて早課の祈禱式を行ひ次で各々其房に歸り、聖書を讀み或は聖教書を筆記し、晝は定まれる時間に三時課、六時課、九時課と稱する公祈禱式を行ふが爲に會し、其餘の暇を彼等は好める勞働に從事し、以て貧しき生活を營む料を得たり。彼等は之と同時に財寶を私有せざる約を立て、使徒時代の如く凡てを共有にしたるが故に彼等の間には、我物若しくは彼の物と稱する言語は全然無用となれり。此等苦行者の生活は勿論寂しく困難なりしと雖、此生活に由りて得る心靈の平和は實に其が一大報賞にして彼等は神の慈憐に對する希望と、上より彼等に授けらるゝ恩寵に對する喜悅とを

常に心に味ひ其を無上の樂とせり。約翰は四年の間(三七五年——三七八年)斯くの如き苦行生活を送りたるが彼の苦行に對する熱心は此嚴格なる生活によりて益々勵されたり。實に彼の如く多くの奴婢に侍かるゝ富める家に生れ、且つ慈母の愛護の下に何等の不自由もなく人となりし者に取りては、苦行生活をなし有ゆる困難を忍ぶことは人一倍の苦しみにして、且つ彼の身體が至て虛弱なるが爲に斯かる荒き生活に彼の果して耐得るや否やも自ら甚だ危める所たりき。然りと雖彼は體の虛弱なるに反し、其精神は强くして啻に苦行者の遭遇する凡ての困難に打勝ちたるのみならず、尙進んで苦行を排斥する時代の恐るべき思潮とさへ戰を宣告したり。

▲苦行排斥の風潮

苦行を排斥する思潮は皇帝ワレントの即位すると同時に起りたるものにして、アリイの教義に心醉せるワレントは正教の當面の敵となり、盛に正教に對して諸種の迫害を加ふる内彼は正教の主要なる要塞とも云はるべき者が苦行たることを知るや其精力を一向苦行排斥に注ぎ命令を以てニトリヤの有名なる修道院を毀たしめたり。彼の變行は其後ニコミヂヤに於て二十四人の正教の牧者を燒き殺して一先づ終を告げたるが、斯かる人道に反せる蠻行に對しては異教徒さへ憤激の聲を漏したり。然りと雖多くの者の間には又皇帝の意を迎へて苦行者を國家及び皇帝の敵なりと稱し、苦行をなさんと志せる者あれば有ゆる妨害を試みて皇帝の蠻行を助けたる者甚だ少なからざりき。

▲苦行生活の擁護者としての約翰

斯くの如き時代に際し約翰は己の一身を苦行生活の援護の爲に捧げ筆を執りて『苦行生活をなさんと志せる人を憎み其事を妨ぐる者に書き送れる三書』と題する書を著したり。此書は實に約翰が苦行に對して有する抱負の凡てを吐露したるものにして、又最も流暢に曠野に在りて神と親しく語る時に人の靈が如何なる幸福を其間に見出すかを說きたるものなり。此と同時代に約翰は又『帝王の威力と富と特權と並に苦行生活に依て得る眞實なる基督教的智識との比較』と題する一小論文をも公にしたるが其書は苦行者及び苦行者たらんとする者の爲に教訓を與ふる盡くる所なき源泉たり。斯く約翰は筆を執りて他の者を勵し其を教訓すると同時に自らも益々嚴しく己が身を處し、今は多くの苦行者と共に共同生活をなしつゝ互に苦行を勵む事に滿足せず、彼等を離れ獨り洞窟に入りて、一層嚴格なる箇を己が身に加ふるに到れ

り。彼は自らイリヤ若しくは授洗者約翰の助力の己が内に在るを感じ彼等に倣ひて曠野に逃れ、人界を遠く距りたる邊に在りて來るべき大なる使命を待ちたり。

▲約翰輔祭と爲る

彼は苦行に熱心なるより終生曠野に居らんことを志したるも、神は其事を許さず、彼の如き偉大なる燈火を曠野、及び洞窟の見えざる内に置くを惜み、彼を教會の燈臺上に立てゝ萬人を照さしめたり。蓋し約翰の健康は餘りに過激なる苦行をなしたる爲に衰へ爲に彼は曠野を出でてアンチオヒヤに歸るの止むなきに至れり。彼がアンチオヒヤに歸るや福メレンチイは非常に彼を歡迎し直に彼を立てゝ輔祭の職に就しめたり。嚮に主教の高き位を辭したる約翰は今此卑き輔祭の職を遜り

て受け(三八〇年)彼の生涯は茲に其新なる紀元を開きたり。

▲補祭としての約翰

約翰は輔祭に任ぜられし時より、再び世の人に歸りたり。されど彼は既に世の奴隷に非ずして、世の爲に働くの人なり。其若き日に於て世の有ゆる快樂に耽りたる彼は今教會の役者として、此等の快樂に對し戰を宣し、勃々たる心靈の勇氣を以て熱心に己が務の爲に盡瘁したり。當時代の輔祭職は實に激務の一にして、啻に主教の命ずる所を行ひ或は教會の諸聖務を勤むるのみならず、彼は亦、病める貧しき基督教徒の爲に扶助を計らざるべからず。されば彼は其職務の傍此等の病者を見舞ひ死に瀕せし者を慰藉し、貧しくして一家を維持し能はざる者には扶助をなし、其將來の道を授くるなど其務は實に容易なるものにはあらず、

此克己と誠の愛ありて初て行はるゝ困難なる輔祭職は實に高位の牧者たる準備をなすには好個の學校たり。嚮に曠野に在りし時、約翰は轗軻にして志を得ざる者も見ず。さらぬだに苦患多き人類を愈々惱す所の「病魔」及び「不幸」をも知らざりしが故に從つて人を愛する念に乏しく、遂には全く其を忘却するに至りしも今の職務は彼を再び實世界の内に引返して彼の眼前に涙と煩悶の充滿せる世を展開して示せり。是れより先約翰は其辯護士たる時既に世の色々なる境遇に會して其の實情を親しく見聞したりしが、當時の彼は其の職務上富者及び有力者の貧者及び無力者と訴訟を起したる際には常に前者の爲めに力を盡さざるべからざる地位にありたるも、今の彼は斷乎として此等の力なく貧しき者の爲に侵し難き保護者となりて、彼等の爲めに屢々貪慾にして厭く所を知らぬ富者と戰ひ彼等が貧者を陷れんとする惡計を制し

無辜の民が冷酷にして貪慾なる官吏より被る壓制を排して此等の民を救ひたるが特に彼は救主基督の許に招きたる者にして惱める者の救助には殆ど其力を違算なく注ぎたり。斯くの如くにして約翰は二種の教育を受けたり。即ち一は曠野に於ける教育にして彼の精神を强固にし彼の心をして神を見る迄に清淨なるものたらしめしもの、他は社會的教育にして彼をして人の世の病魔と不幸と不義と罪惡に充滿せるものなることを知らしめしものなり。實に此等のことを凡て彼の辨ふるは彼が將來なすべき職務に取つて最も必要にして彼が後年誠の牧者たり、誠の貧者及び艱める者の友たりし所以のものは、確に此一事に歸因すと稱するも過言に非ず。彼が貧しき者に與へたる最初の金錢は彼自身の所持金なりしと雖、其金員の盡きたる以後約翰は何物をも自己の者とせず、己が持てる所の凡ては皆貧しき者に屬すべき物なり

とせり。

▲筆に依れる約翰の傳道

由來教會に在りて教を宣ぶることは司祭の職にして輔祭の干與する所に非ず。是れ決して後者が此事に對して權を有せざるが爲に非ずして彼が主として爲す所の慈善的行爲は、彼をして教を宣ぶる時間と勞力とを餘さゞるが故なり。されば約翰も輔祭たる間は口を以て傳教をなさず。されど筆に依れる傳道は彼の好んでなしたる所にして、彼の有名なる『苦行者スタギリイに書き送れる三つの訓話』は此時代の著作に係るものなり。此書は彼の竹馬の友の一人が約翰に其心中の苦悶を披瀝したる時其友を慰めん爲に筆を執りたるものにして其内には人生の萬事は凡て神の照管の下にあるものなれば、其善に赴くと惡魔の凌

辱に委ねらるゝも皆均しく神の許し給ふものなることを說けり。其他『獨身生活に就きて』及び『若き寡婦に書き送れる』の二書も亦此時代の作にして其内に含める思想は孰れも高尙にして、其後者の如きは特に誠實なる筆跡により他書に秀でたるものなり。約翰は此書を著して其内に己が母を例に引きて其生涯を叙し、彼女が一生を己が子の養育の爲に獻げて寂しき寡婦の生活の内より慰藉を見出せることを記載したり。凡て此等の書を見るに約翰は嚴しく身體の潔白を保つに熱注せる者にして其書の内には肉慾の誘惑と戰ふ時に當りて、心靈の武裝に要する諸種のことを記載せり。尙此時代に公にせられし作物の内には彼の有名なる書『神品の職に關して』最後の訂正を加へたる者も有り、此書は素と其友ワシリイの爲に筆を執り、後其親しき友人間に示されたるものなるが其書の内容は教會の役者及び全信者の爲にも亦大に益す

る所あるが故に後公にせられたるものなり。

▲約翰司祭に選叙せらる

約翰は五年の間輔祭の職を務めたるが其時敬虔なる主教メレンチイは其多難なる生涯を終り、其後繼者として金口がアンチオヒヤの學校にありし時の師なる司祭プラウイアン推薦されたり。同司祭は以前より約翰の力量を知れるが故に其主教に選ばるゝや直に約翰を司祭の職に昇せたり(三八六年)時に約翰の年齢三十有九なり。

▲社會の不穩と教會の混亂

當時アンチオヒヤの教會は、眞の基督教的生活を營む事を妨ぐる所の多くの妨碍を取除かんが爲に、充分なる勇氣と熱誠とを有する牧者を

要せし時なるが故に約翰の前途の事業は重大なるものあり。アンチオヒヤは異教徒並に異端者と基督教徒との殆ど相半せる人口二十萬を有する東方の一大都市にして、既に其黃金時代をこそ過ぎたれ、異教は此處に著名なる己が有力者を有し彼等は憐むべき一片を教義と哲學とを唯一の楯となして尙基督教に反對し、斯て彼は之と同時に異教が今日迄に了解されたるより以上の意義を教に附加して其を解釋し知らざる內に異教の勢力を挽回せんと企てたり、當時異教の學校に出で て修辭學及び哲學を講じたる教授は孰れも當代に名ある修辭學者及び哲學者なりしが故に、其門下なる基督教徒も其師の說く所に傾かんとする徵あり。且つ他方よりは又富と產業を以て勢力ある異端者等が其地位を利用して人民の心を收攬し、其所謂憎むべき十字架の教に打擊を加へんが爲に異教徒と同盟をさへ結ばんとし之に加ふるに當時

の基督教徒は其事業及び商工業を多く異教徒及び異端者と共に經營したるが故に知らず〳〵彼等の惡しき感化を受けて。惟り基督教徒の住居する町に在る如き熱心なる宗教心を失ひて彼等の大部分は半異教徒に化し終り、基督教を見るに一の儀式を以てし、外形の規則にのみ意を止めて其精神は凡て異教の影を止めし風俗習慣の爲に奪はれたる如き有樣を呈するに至れり。斯く異教と基督教と相混同したる結果は基督教徒の內に異教の哲學者及び修辭學者のなすがごとく自己の智識を以て基督教の教義の奧密なる點を改造せんと企だつる學者等輩出し來りその學者等が各々異なれる教を說くより議論百出してために多數の黨派起りて屢々烈しき爭鬪をなすに到り、教會の平和は茲に破綻を生じ來りたり。特に甚しきは或學者が公然異端及び諸種の迷信の宣傳者となり岐教の首腦となりて、アンチオヒヤの教會を風波

に漂はさるゝ船の如くに動搖せしめたる事なり。斯くの如くにしてアンチオヒヤ教會に屬する者の中には「アリイ」教徒あり「アノメイ」教徒あり。各種の說を主張する「グノシス」教徒あり。此等の者は凡て眞正なる信仰に取りては和すべからざる仇敵なるが故に教會の牧者は職として必然に此等の者と戰はざるべからざるに到れり。加之當時の社會は宗教の腐敗せる丈、社會一般の風教も高尙なること能はず。其間往々にして高潔の士なきに非ずと雖其多數は凡て半異教徒的の生活をなして一向肉慾と基督教徒のなすに適せざる諸種の娛樂に耽る者となり。劇場と遊戲場を教會以上に喜び基督教の教ふる所の隣に對する愛の如きは殆ど其影さへ留めず、富豪は巨萬の富を抱き宏大なる邸宅を構へ而して有ゆる肉慾を縱にし明日を送るべき糧なき爲に饑餓と病疫に困められ將に悶死せんとしつゝある多數の貧民を顧ず貧者も徒に己

が拙き運命を泣くの外其を逃るゝ手段を講せず。社會に於ける貧富の懸隔は日に甚だしくなり、爲に社會は一種不穩の狀を呈し來りて富者にして力めて己が貪慾を充さんとして有ゆる壓制を貧者に加ふれば貧者は又隙を見て其に報ゆる所あらんとし其狀正に危急なるものあり現にアンチオヒヤの如きは既に其不穩の狀一度ならず、表面に出で流血の慘狀を呈したる程なれば此等の社會に入りて衰頽せる其德義の間を動搖せる船の如き教會を率ゐて「善」なる岸に達せんには實に己を捨てゝ職の爲に殉ずる所の善牧師の輩出を必然に待たざるべからざる期にあり。

▲一 愚婦『金口』の名を捧ぐ

然も斯くの如きは敢て此を遠く求むるに及ばずして約翰に於て其人

を見出すことを得たり、蓋し彼はアンチオヒヤに生れ而して其生地の裏面に潛在する善惡の兩方面を合せ知れる者なればアンチオヒヤの牧者としては此より可なるものなかるべく主教プラウイアンの如き特に此點に注意を拂ひ約翰を目するに自己の唯一の助手となし彼の事業殊に傳道に關しては大なる自由を彼に賦與したり。されば輔祭たる時は一向慈善的事業にのみ盡瘁したる約翰は教會に於て教を宣ぶべき地位に立つや、其天賦の才能を一時に發揮して此に從事し而して彼が司祭職に叙聖せらるゝ時に際し、其叙聖の樣を見んとて集り來りたる多くの教衆の前に立ちて彼が述べたる最初の説教の如きは實に非常なる感動を教衆に與へたり。此時の説教は敢て宣教者たる者の價値の如何を述べたるものには非ずして寧ろ彼の有せざるべからざる溫從と謙遜とに就きて説きたるものなりしと雖、此新なる傳道者の非

凡なる天才は忽ちにして四邊に傳り、其名聲は諸種の教徒と多數の種族の雜居して極めて新奇なる事をのみ好むアンチオヒヤの市に於て特に喧しく、彼が出でゝ教を宣ぶる會堂は常に聽衆を以て溢れ約翰の口より出づる神來の說教は此等の聽衆の舌を捲かしめ、彼等をして殆ど狂喜せしめたり。抑もアンチオヒヤ人の雄辯を愛する度は實に非常なる者にして彼等がリワニイを重じたるも一は其が爲なり。然るに今やアンチオヒヤの人民は此有名なりし雄辯者に勝ること數等にして而も其辯の力あると其說く所の切實なるとによりて一世を傾倒するに足る一大雄辯者約翰の顯出に遭遇したれば彼等の狂喜したるも蓋し當然のことなり。リワニイの辯の有名なりしは其辯に燃ゆるが如き熱誠ありしと其修辭の巧妙にして其片句に各々餘韻ありしに基くものなるも彼が辯は素と人の衷心を感動せしむる點に於て敢て力あるものには非ず。此に反し彼の弟子なる約翰の辯は修辭の巧拙に意を注がず、片句の餘韻に其心を傾けざるも彼の辯は潑溂たる活氣を以て優に人を動かすに足れり。蓋し彼は己が說かんとする說教の材料を最も卑近なる日常の事實に採り此を解釋するに上は高等教育を受けし紳士より下は無學なる農民の徒に至るまで均しく解し得らるゝ如き言語と說とを以てしたるが故に彼が辯の各句は各々生命と力ありて人の肺肝を貫きたり。實に斯くの如き說教はアンチオヒヤ初まりて以來その住民の未だ嘗つて聞かざる所にして彼等が約翰の說教を聞きて心の堂奧なる秘鑰を貫かれ或は神の怒の恐るべきことを聞きて戰慄し或は其無限なる愛のことを知りて狂喜し其約翰の一言一句に悉く注意を拂ひたるも無理なきことなり。會堂內に居る群集は又此神來の說教者が自己の都市の裏面に潛める所の罪惡卽ち富者の貪慾にして

慈悲なきこと貧者の鄙劣にして騒擾を極むること、官吏の虚名を得るに汲々として屢々強奪に類する行爲をなすこと、婦女子が何等の有益のことも爲さずして不品行に身を持ち崩すこと等を擧げて此を其面前に責むる時に當りては悉く其色を失ひて自己の罪惡を深く認むると共に又此説教者が群衆に神の助を約し彼等の反省を促し「此を改悔に招く言葉を以て其神來の説教を終らんとする時に當りては、幾萬の聽衆は自己を忘れて不覺拍手し其頽雪の如き響は説教者の最後の句を打消し終るを常としたり。特にアンチオヒヤ人をして喫驚せしめたるは約翰の説教が朗讀的ならずして一言一句悉く其肺肝を突きて出で宛も其説教が聽衆と自づから對話をなせるが如き樣を呈せしこと是なり。斯かる説教はアンチオヒヤありて以來未だ嘗て聽かざる所にして今に至る迄、何人も一の草稿もなくして斯くの如く神の言を説き

し者あるを知らず。神の恩惠は彼の口より流れ聽衆は彼の説教に醉ひ厭くを覺えず、されば速記者は教會に入り來りて彼の説教を速記し此を同好者に賣りて利益を得其説教は到る處話頭に上りて人々の談話の中心と爲り時には宴會の席上又は市場に於て公に朗讀されたることあり。而して或者は其説教を愛するの餘り之を暗誦して朝夕之を口にするを樂としたり、事體斯くの如きを以て此能辯者が説教をなすとの報一度市内に傳るや全市は爲に動搖き瓦り商賈は己が店を捨て、建築師は其建築の手を休め、辯護士は法廷に遲刻し、職人は其職を中止して皆競ひて會堂に走り、約翰の説教を聞くことを以て一の名譽となし、聽衆は約翰の能辯を讃美するに如何なる言を以てすべきかを各々心に案じたり。而して其言ふ所を聞くに或人は彼の辯を讃むるに『神及び基督の口』なりと云ひ、或者は『甘き言』なりと稱へ或者は『蜜の如く且つ正

しき言』なりと語り、此等の讃美は宛も神より呼びなされたるかの如く、一に集りて彼を『金口』と呼ぶに至れり。此名稱は遂に基督教會と其史上に永久に彼を記念するの名稱となりたり。抑此名稱の出でたる起因は極めて些少なる事實にして或傳によれば實に下の如きことより起り來りたるものなりと、卽ち約翰の說教は常に平易にして無學者に解し易く且つ其說く所も多く德義上の教訓のみなりしが、時に彼の說教は純定理的の教に走ることあり、其時に當りては彼の論は宗教の高尙なる眞理に到達し多くの聽衆は其論の餘りに高尙なるが爲に毫も解し能はざることあり。或時の事說教に彼は同じく斯くの如き高尙なる論に走りたるに其席に一人の無學なる婦人あり、常に敬虔なる心を以て約翰の說教を聞ける者なりしが如何に心を傾くるも其甘き言の深き意を解する能はず遂に忍び難くなりて不覺起ちて叫びて曰く『心靈の

師否金口なる約翰よ、卿が掘り給ふ聖教の井戸は餘りに深くして我等の短き智識は其底に達せず』と、群集は一婦人の叫びたる此言を以て神意に出でたるものなりとし、其以後は彼の愛する宣教師を稱ぶに『金口』なる稱を以てせり。

金口の稱を一の形式として聖約翰に必ず附するに至りたるは餘程後世(五世紀に開かれたるハルキドンの公會より)の事なるが、一の綽名として此稱を用ひたるは既に約翰がアンチオヒヤに司祭たりし時よりのことにして此に關する確證は史上に明かに記載されたり

然るに此事件は計らずも約翰をして大に悟る所あらしめ、彼は巧妙なる修辭を以て高尙なる理論を人民の前に講ずることの全く無益なるを知り、其以後は極めて平易なる言語を選びて教訓に渉れる說教をなし如何なる無學の輩にも了解せられ、彼等が其内より靈益を得るものたらんことに務めたり。されば其以後になせる約翰の說教は以前に比

して遙に力あり價値あるものとなり、其言は直に人に入りて其心臟を突き爲に心の惱める者は彼の說敎によりて直に其心の慰藉を得、時には身體の勝れざる者さへ其說敎によりて輕快を覺えたる事もありたり。

▲先師の名譽を高うしたる約翰

彼は又如何なる事情ある時と雖一週に二三度の說敎をなさゞることなく其を愛する度は實に非常なるものあり。特に或事件に臨みて說敎をなす際の如き彼の熱誠は表に溢れ其靈に感じたる面は眞に燃ゆるが如く人の目に見えたり。未だ彼の司祭職に就ける初年のことなり、約翰は去る三百八十一年に君斯旦丁堡に歿し其屍のアンチオヒヤに運ばれて居ながら、或事情の下に殆ど五年間其葬儀を公然營む能はざり

し主敎メレンチイの爲に自ら率先して盛大なる記念祭を擧行したるが其時彼は生前己を保護したる此敬愛する主敎の名譽の爲に一場の說敎をなし其內に於てメレンチイの敎會に對して有せし功績を擧げ且つ其配下の信者が彼に對する親愛の情の厚かりしことゝ彼の名を己が子に附し、或は彼の像を指輪、印鑑、盃盤及び室內の四壁に刻して常に己が身を離さゞる程なりしことを演べ此偉大なる宣敎者は今や世を去りて玆に再び見る能はずと雖彼は斯くの如くにして今も其嘗つて配下たりし信者の中に在りと述べたり。彼がなせる此說敎は聽衆に永久拭ひ去る能はざる深き感動を與へメレンチイの名は此れよりしてアンチオヒヤ敎會と離るべからざるものとなれり。然れ共アンチオヒヤ人は此感動と共に亦約翰の說敎を聞きて彼の天才に驚き彼等が此非凡なる牧師を己に有することの名譽なるを合せて知覺したるな

り き。

▲安市に於ける暴徒の騒擾

斯くてアンチオヒヤに於て約翰が司祭たりしより早くも二年の星霜は過ぎ、三百八十八年の大齋期となり。今や此大なる宣教者は十分なる悔改の收穫を信者の心の畑に期したるに、計らずも茲に不時の一事件の生じたる爲、彼は其心を他に轉ずるの止むなきに到れり。由來アンチオヒヤの民たる極めて爭亂を好む人民にして、事の己が利害に關する際には實に驚くべき努力を以て互に相爭ふを常とせり。當時羅馬の國内は皇帝フェオドシイの卽位してより以來彼が熱心に其行政に意を注ぎ、非常なる困難の日に位に上りたるにも係らず、克く四邊の敵を排し國家をして内憂外患より安からしめたる爲に、帝國は十年の間一の爭

亂もなく平和に其日を送りたるが、此より先き四年以前に彼は其子アルカディイを「アウグスト」の位に就かしめ今や其就職の五年に相當せしかば、彼は其子の爲に全國に亙る紀念祭を行ひ、且つ經濟上より打算して己が卽位の十年祭(其十年に達するには尙一年を經過せざるべからざりしと雖)をも同時に行はんとせり。在來斯くの如き祭典を施行する際には軍隊の各員に一人につき五金つゝの下賜金を與ふるを例としたるが故に、此祭典に要する費用は甚だ莫大なるものなり。フェオドシイは此費用を全國に負擔せしむることを酷なりとし之を己が善政の爲に少からぬ餘財を貯蓄したる都市に分擔せしめんとせり、然りと雖、斯くの如き豐有なる都市は却て皇帝の恩の有る所を知らずして、此祭典の費用の分擔を快しとせず、先づ歷山市は起ちて皇帝の此勅令に反抗し、彼に次ぎてアンチオヒヤ市に起り此費用分擔の敕令のアンチオヒ

ヤ市に於て朗讀されたる時の如き、其地の元老院議員は自己の名譽を全く忘却して己が席を蹴りて町に走り新しき租稅のアンチオヒヤの市を衰頽せしめ、人民は此新稅の爲に己が祖先の家を人手に委ね、其愛する妻子を奴隷に賣却する悲境に立到るべきことを大聲に呼び歩きたり。此響は宛も爆發物に火を點じたるが如く忽ちにして全市中に傳りたり。アンチオヒヤ內に住居して常に事あれかしと待ち構へたる多數の無賴漢は此機會を利用して一の騷擾を釀し、其騷擾は遂に蔓延して一般人民の上に波及し、茲に多數の人民は堂々隊を整へて主教フラウイアンに新稅廢止の嘆願を皇帝に取次がしむべく、彼の居宅に迫りたり。然るに此時不幸にして主教フラウイアンは己が住居に居らざりしを以て、群衆は制し難き不滿を暴行に變じ、一擧して宏大なる公衆浴場を破壞し終り、轉じて鬨聲を揚げて日頃より不滿を抱ける縣令及び

法官の宅を襲ひたり。此より前法官は市中に爭擾ありと聞くや自ら期する所ありけん窃に家の裏門を開きて身を以て逃れ出でたる爲彼は何等の危害をも身に蒙らず、群衆も彼を尋ね出さゞるが爲、直に進んで其法廷を襲ふに至りたり。法廷內には人の目の最も觸るゝ處に皇帝フェオドシイ其皇后プラチルラ、皇太子アルカディイ及び諸皇族の塑像安置されたるが、其威嚴ある神々しき樣を一目見たる群衆は不覺一種云ふべからざる尊敬の念に打れて、其內の特に思慮ある者の如きは遂に自己の暴行を愧ぢて他の者を勸め其暴行を止めて家に歸らしめんとせしが其刹那、數人の小兒が無意識に此像に投じたる石は再び暴動の信號となりて群衆の心は再び茲に激動し「暴君を」と叫びざま瞬く間に皇帝の像を粉碎し終り且種々なる侮辱を與へて町を曳き廻し終に此をオロント河に投棄したり。

▲金口より迸る譴責と慰藉の辭

然るに群集の良心は斯くの如き非禮の暴行を逞うしたる後に至りて初めて覺醒し、自己の行ひたる罪惡の重大なることを認識すると共に、其に由りて來るべき刑罰を思ひ彼等の心は玆に恐るべき煩悶の狀態に變じぬ彼等の犯罪は實に容易ならぬ重大のものなり。皇帝フェオドシイは素と寛仁大度を以て聞えたる帝なれば、群衆の犯せる罪にして惟り自己を侮慢したるのみに止まらんには其犯罪の凡てを或は許したるべしと雖、彼の膝下に愛する皇后プラッイルラが其受けたる侮辱の爲慟哭するに至りて其罪を赦すこと能はざるに至れり、人民が皇帝より恐るべき刑罰の下るべき日を待ちたる蓋し至當の事と言はざるを得ず、若し帝にして望むべくんばアンチオヒヤの全市を粉碎して此を

燒き盡し其人民の悉くを奴隷に賣却することも蓋し出來得ざることに非ず。されば全市は今や非常なる恐怖の念に襲はれ、各人は其犯せる罪惡を思ふ毎に慄然として殆ど知覺を失ふ程に戰慄するが如き狀を呈し、人民は茫然として其自ら爲すべき所を知らず、且つ將に來るべき刑罰を輕からしむるが爲に力を盡し呉るゝが如き恩人をも得ずして今や彼等の身は全く神を措きては何處にも賴るべき所なき孤獨の身となり了りたり。されば彼等が教會に附きて、其牧者たる金口約翰より救助と慰藉を得んとし、失望の極其手を自ら折り、其胸を自ら刺し、涙を垂れて教會の門に投じたるは決して無理なきことにして又教會の善牧者たるものも己が牧群の斯くの如き悲慘なる目も當てられぬ樣を見ては終に心を動さゞること能はざるなり。然りと雖、彼等の行ひたる罪惡は約翰の金の如き口をも言葉なからしめし程に重く且つ大なる

ものにして彼の心は云ひ難き悲痛の情をもて滿され爲に一週日の間一言をも發せず人民の心をして彼等の行ひたる暴舉の誠に無智なる行爲にして且つ重大なる罪惡なりしことに思ひ到らしめたり。斯くの如くにして乾酪を斷つの週間の土曜日に至りしが此日彼は立ちて深き哀悼の情を以て人民の前に顯れ彼等に與ふるに慰藉と教訓の言を以てせり。此時の聽衆は日頃にも倍し己が愛する牧者の述ぶる神來の說教を層一層心に深く銘し、聽衆は不覺己が罪の大なるを知りて悉く落涙せざる者なき有樣なりき。約翰は集れる者の嘆聲を發し、涙に暮れつゝある中に述べて曰く、我に向ひ抑も何を語り、何を述べんとするや今は、涙の時にして言ふべき時に非ず號泣の時にして言の時に非ず。祈禱の時にして傳道の時に非ず、汝等の行ひし罪は重大にして、其傷は醫し難く、其毒は深うして上よりの助けを以てせざるの外は有ゆる醫術

を施すとも何等の快き者あるを見ざるべし。我をして今の此不祥に對して泣かしめよ。我はイオフの友の如く七日の間一言をも發せざりき。嗚呼、彼をして今てそ我が口を開き、此遍く擴れる災害と不幸に對し泣くを許せ。愛する者よ。我等に此惡を持ち來りし者は誰ぞ。我等に此怨を漏せし者は何人ぞや。此くの如き變遷は抑も何處より來りしや、嘗ては他に類なかりし名譽の此市は今他に類あるを知らざる憐むべき市に變じ嘗つて溫順にして、爲政者の命に服したりし此市の民は今や遽に變じて、云ふだも快からぬ暴行を敢てするに至りぬ。今に至りては我は只泣き號ぶあるのみ、さはれこれ刑罰の重く恐しきが爲に非ずして、其行爲の餘りに無智なるが故なり……我が聲は號泣の爲に嗄れ極て我は口を開き舌を動して言葉を發するだに物憂し」……と集れる聽衆は金口約翰の此言を聽きて悉く泣き、女と小兒の歔欷の聲は彼の說教を

して聞えざらしめたり。されと彼約翰は決して其牧群を斯くの如き絶望の域に長く置かず、直に彼等に慰藉の言を與へて其流るゝ苦き涙を拭ひ心の痛傷を勦り、神の慈憐に希望を囑して心を安からしめ、萬事に於て常に神に心を注ぐべきことを教訓したり。彼は述べて曰く「基督教徒たる者は神を知らぬ者の上に出で、常に未來に對する希望を以て自らを激勵し、人の世の罪惡の攻擊に堪へざるべからず。愛する者よ、されば絶望するを止めよ。我等を造り給ひし神は、我等が自ら己の救贖を慮るよりも以上に我等の事を顧慮し給ふ」と。

▲老主教哀訴の途に上る

人民は金口約翰の說教を聽きて心を安め各々其家に歸りしが、高齡なる主教フラウイアンは彼等の身を慮ること殊に厚く、騷擾の報告を齎

せる使者がアンチオヒヤよりコンスタンチノポリに赴くべく今や其馬に鞭を當て、而して彼の宣ぶる一言は皇帝をして恐るべき極刑を人民に宣告せんとするを知るや主教フラウイアンは皇帝の怒を宥めんが爲に其身の高齡にして既に力弱きにも係らず、自ら親しく皇帝に謁して代願すべく其老體を携へて都に向ひて旅立ちたり、行程遙なる此旅は老體に取りては蓋し容易のものに非ず(アンチオヒヤよりコンスタンチノポリに至る里數約三百里)されど、善牧者たる彼は一身を捨て其牧群の爲に盡さんとし、直に旅裝を整へて出立し、道に使者を追ひ越さんと一向旅程を急ぎたり。然るに偶々道に大雪に會し爲に彼はタウラの市に暫く留るの止むなきに至りしかば、使者は彼に先ちて都に到着したるも、之が爲に彼は些少も失望する所なく萬難を排して己が行程を繼續したり。此慈愛深く、獻身的なる老牧師の哀訴が果して如何

なる結果を齎し來るやは何人も測り知らざる所なれば、人民の心は依然として過度なる不安の念に襲はれ、日として心の穩なることなく、其眞に慰藉とする所は只一人約翰の有るのみ、されば彼は日々群衆の前に出でゝ慰藉の言を述べざる日なく殆ど二十二日の間絶えず彼は群衆に向つて教を說き民も亦非常なる熱心をもて約翰金口の言ふ所に耳を傾けたり。此時の彼が說教は彼の有名なる「偶像に關する談話」にして、彼は其中に於て、恰も目前に其光景を睹るが如く人民の行ひたる暴行を描き、聽衆をして其行ひたる所を愧ぢ、己が無智を悟りて彼等を反省せしめ、而して神の慈憐の限りなきを說きて、人をして其慈憐に賴る心を起さしめたり。されば人の教會を出づる時に當りてや、其心は全く穩かになり、些少の憂だに殘らざりしかば、聽衆は各々斯くの如き偉大にして善良なる牧者を己が有てる事の如何に幸福なるかを思ひ、神を

讃美する祈を口々になしたり。

▲修道士等特赦を哀願す

約翰は全大齋期中殆ど絶えずアンチオヒヤ市民に向つて教を說きたるが人民の心は當時主教フラウイアンは既に都に着きたりや否や、皇帝は果して彼の言を納れ、彼の哀訴を採用するや否や、只其事にのみ意を傾け居るが如き有樣なりしかば、金口約翰の說教も悉く其事たるを逃れず、彼が主教フラウイアンより得る旅行及び哀訴に關する諸種の報道は常に彼が說教の最初の頁を組立つる材料なりき。されば彼の說教を聞く者は故に一層の注意と熱心とを以て彼の言に耳を傾けたりき。是より先アンチオヒヤを發したる使者は、高齡なる主教フラウイアンに先ちて都に入り騷擾の有樣を具に皇帝に奏上せしかば、皇帝は直

に其事件の審理を行はんが爲に特別なる官人を選び、これをしてアンチオヒヤに趣かしめたり、官人は市に來りて直にアンチオヒヤ市が有する特權を剝奪する布告を發し法廷を開きて多數の犯罪者を檢擧し爲に、獄舍は其狹隘を告ぐるに至り止むを得ず遂には彼等を屋根なき大なる柵内に繫留したり。されば市民も今は全く失望の域に沈みて、何處にも之が救助を求むる所なき者となれり。然るに全權を帶びたる官人が其法廷を設けたる第三日目に當りて、例に由り車を駕して役所に赴かんとせるに、顏色憔悴として一種異樣の風をなせる多くの人、道に彼等を要し、其車をして行かざらしめたり。是れアンチオヒヤ市に降り來りたる恐るべき災難を聞き、己が住へる洞窟を捨てゝ、不幸なる者に極力扶助をなさんとて市に來りたる近郊の隱遁者なり。彼等は自ら市民のなせる犯罪に對して何等の關係なく、且つ彼等は神の外誰をも恐

れざるが故に、毅然として、皇帝より全權を委任せられたる官人の前に立ちアンチオヒヤ民に慈憐を垂れ特赦を行ふべきことを彼等に向つて哀願したり、特に彼等の中の一人なるマケドニイの如きは、其身高齡にして身の丈低く且つ虛弱なるに係らず、些少も逡巡する所なく、一人の官人の外套を捕へて、彼を馬より下ちしめ、憐むべきアンチオヒヤの市の爲に慈憐と寬恕とを皇帝に代願せんことを請ひ且つ其終に附加して曰く、「見よ皇帝も人なり。されば彼も己に似たる者を滅すことの如何に恐るべきかを知れり。豈皇帝は己が怒の爲に殺せし者を蘇らす力ありや。彼をして神の憤怒を思はしめよ。」と、官人は人民の畏服せる此非凡なる隱遁者の言ふ所に感動し、必ず皇帝に代願すべきことを約し再び馬に鞭を加へて法廷に其頭を向けたり。其處には死刑の宣告を受けたる多くの人々穩ならぬ心を以て已に早くより彼等の至るを待ち居

れり。彼等が法廷の門に近ける時、其門の傍に主教及び祭司の一團あり て再び彼等を要し、彼等が犯罪者に對して罪を寛うする約束をなさゞ る内は彼等を止めて法廷の内に入らざらしめたり。其一群の内には金 口約翰あり、彼は一群の最も目立てる邊に立てり、彼等は官人の邊に集 ひ其膝を捕へて、或は謙遜なる願を以て、彼等を説き或は殘忍なる行爲 に對する神の憤怒の恐るべきことを以て彼等を威赫し、其言は彼等を 痛く動かし遂に彼等をして特赦を行はしめたり。特赦を行ふとの聲は 瞬間にして群集せる人民の間に弘り、其を聞きたる彼等は勿論牧者に 至る迄涙を流して其恩惠を深く官人に謝しぬ。茲に於て官人の一人に して貴族なるケサリイと稱する者は有りし次第を上奏し合せて皇帝 に向つて此不幸なる市に特赦を行ふべきことを代願すべく直に旅裝 を整へて君斯旦丁堡に向つて出發したり。

▲特赦請願の成功

ケサリイが旅程を急がして、都に到着したる時には高齢なる主教フラ ウイアンが皇帝に謁見して、己が罪ある壇下に慈憐と寛恕とを哀願す るが爲に全力を傾注し、然も尚ほ其効果を收むることを得ず、激怒した る皇帝は此高齢なる主教がなす哀願を聞くことを快しともせずして、 主教に謁見だも許さゞるを以て、フラウイアンは今は全く絶望の域に 沈める所なりしが、此時ケサリイが都に到着して直に皇城に參内し有 りし次第を詳に上奏して無智なる市に特赦を行ふの至當なるを説き、 彼市民の既に己が犯せし罪惡を深く悔悟せることを復命せしかば、皇 帝の心はこれが爲に少しく和ぎ主教フラウイアンを引きて謁見を賜 ふに至りぬ。主教の皇帝の御前に出づるや敢て目を上げて皇帝を見る

なく其窶れたる姿を以て遠く皇座を離れたる邊に肅然として立ちしかば、此辱むべき主教の己が壇下の爲に痛しくも窶れたる樣は非常に皇帝フエオドシイの心を感動せしめ、彼は自ら歩を進めて主教の許に接近し、戰へたる聲をもてアンチオヒヤ民の彼等に特に與へられたる恩典を忘却して行ひたる罪惡を擧げて是を詰りたり。其時フラウイアンは其心少しく戰きたるも彼は再び心を取り直して、皇帝の前に無智なる下民の行爲の寧ろ憐むべきを說き、彼等の爲に特赦を哀願し、一方にはアンチオヒヤ民の行爲は確かに重刑に價するものあるが故に皇帝の怒がアンチオヒヤの全市を破壞し燒却し盡すとも些少も無理ならざる旨を述べて皇帝の怒を和らげ、遂に人類の上に倘ほ天上の王ありて彼は全人類に對し「若し汝等人の汝になせし罪を免さば、神も汝が彼になせし罪を免さん」との敎訓をなし人互に慈憐と寬恕とを行ふべ

きことを勸めたりと云ひ、只管皇帝に向つて特赦を行ふの正しきを述べたり。高齡なる主教の此說敎は皇帝の心を少からず動し、彼の心はてれが爲に全く穩になり、不覺彼をして地上に下りて多大の恩惠を與へたる者の爲に却りて十字架に釘せられたる世界の王すら其敵の爲に「父よ彼等を赦せ、彼等は其爲す所を知らざればなり。」と、天の父に祈りたりとせば況して人たるものは其受けたる耻辱を赦すべきは寧ろ當然のことなりと叫ばしむるに至りたり。此に於て皇帝はアンチオヒヤ市に特赦を行ひ、主教フラウイアンをして、其命を全市に傳へて、市民の心を安せしむべく其旅程を急がしめたり。皇帝はフラウイアンの出發するに際し彼に謂つて曰く「急ぎ行て、彼等を慰めよ。彼等は其好舵手を得て悉く災厄を忘却すべし。」と此時老主教は皇帝に、其彼が行ひたるアンチオヒヤ市民の特赦を深く感謝し、喜ばしき音信を携へて急ぎて故鄕

なる市に向ひぬ。彼がアンチオヒヤに到着したる時は宛も復活の祭日なりしが、さなきだに光明なる此大祭に際會して喜び勇める基督教徒は彼の到着の爲に愈々狂喜し、且つ市民は既に特赦の皇帝によりて發布されたることを主教の到着以前に傳へ知れるが故に、プラウイアンが市に近きたる時には恰も戰に勝利を得て歸り來れる凱旋者を迎ふるが如き熱狀を以て老主教を市に迎へたり。全市は己が市民の爲に其身を捨てゝ皇帝に哀願したる高德なる主教に滿腔の喜悅を表し而して金口約翰は彼市民の中に立ちて尊むべき牧者の到着を祝せる一大說教をなしたり。彼は感極りて涙ぐめる聽衆に對し宜べて曰く「神を讃美せよ。彼は我等に此喜ばしく樂しき祭を祝はしめ、體に頭を置き牧群に牧者を立て學を修むる者に其教師を授け司祭に司祭長を與へ給ひぬ。神を讃美せよ。彼は我等が索め、我等が豫想したるよりも多く我等に

惠を垂れ給ひぬ。蓋し我等は其恐ろしかりし災厄を逃れたる一事のみにても既に足れりと思へるに憐深き神は我等の願に優りて我等を慈み、我等の牧者を期待せるよりも早く我等の許に歸し給ひぬ」と、而して金口は詳に主教の哀願の次第を物語り終に聽衆に對して此恐るべき試練を永久に忘れざることを戒めたり。

▲社會に對する教會の勝利

以上吾人が述べたる事件は基督教が當代の風教を如何に融和したるかを認むるには好箇の材料にして又此事件の爲に働きたるものゝ悉くが基督教會の牧師たり、苦行者たり、其教徒たることを明かに示し、而して彼等の頭に永久凋む所なき榮冠を戴かしめたり。卽ち高齡なる主教は己が市民の爲に長途の旅行の有ゆる困難を忍び、皇帝の激怒をも

恐れず、又市民の災害を救濟せんが爲に己が身を捨てたる多くの苦行者は、其靜謐なる山里を離れて、騷擾堪へ難き都市に出で、又特に市民の爲には大なる牧者たり教師たる聖金口は日々驚くべき說教をなして市民を誡め、而して其說教は此の不幸なる時に取りては恰も義なる裁判官の威嚇の如く慈母の優しき言の如くに聞え、啻に市民の內の基督教徒のみに止らず異教徒の心にも拭ふべからざる深き感動を惹き起したり。卽ち此騷擾の際には公衆浴場を初めとし演劇及び其他凡て娛樂に關する集會場は悉く其門戶を鎖したるに係らず惟り基督教の諸會堂のみは依然として公務を行ひ、能辯なる宣教師の黃金の如き聲は其一の會堂の內に響きたればリワニイの雄辯に心を奪れたりし多くの異教徒は此不幸なる時に際會して一層の熱誠をもて會堂に集ひ來りて金口の能辯を聞き、其內に勸からざる慰藉と教訓とを己に享有し

たり、彼等異教徒は實に名狀すべからざる驚愕を以て、基督教の牧師が其說教の內に於て描き出す所の己が大なる市の無智と罪惡の充滿せる樣を聞き而して其說教は恰も喇叭の聲の如く多くの者を悔改に招きたり。異教徒は又金口の說教によりて、如何に此地上の名譽と富の空しく且つ移りやすくして不幸及び困難の日に際會して些少も心を安せしめ、生命を救ふものならぬことゝ、基督教徒が生活の目的及び其最上の幸福を來世の滅亡せざる寶庫に期待せる希望の如何に高尙なるかを深く悟りたり。彼等は又善行が滅びざる唯一の幸福なること、法律を犯すことの甚だしき罪惡たること及び死は善き人の爲には恰も尙ほ一層の幸福なる生命に移るが如く極めて安らかなること並に地上の災害は靈魂を淸め、これを高尙なるものたらしむるには最も利益あるものなることを知りたり。彼等異教徒が有名なる基督教の宣教者よ

り此世界に始もなく終もなく永久に存在し全智にして全能なる造物主ありて彼は恰も父の如く全人類の事を慮り、且つ其神の懸慮は、一筋の髪も其許なくして頭より落ちざる程に深きものなることを聞きたる時には虚無にして災害の充滿せる此世界は一種別樣の感を惹起し、基督教の信仰が、人の生活に何等の光明をも與へざる暗黑なる異教の迷信に比して如何ばかり超絶せるものなるかを明にしたり、斯くの如くにして金口の説教を聞きたる多くの異教徒は偶像を崇拜すること の無智なるを悟りて基督教の信仰に轉じ、擧りて洗禮を受くるに至り恐るべき妄動は端なくも神の計り知るべからざる深慮によりて、基督教の盛になるべき動機となり、地上に於ける神の王國は今に至る迄異教の迷霧の中に彷徨したる多くの會員を以て其數を增加したり。

▲周到なる聖金口の注意

アンチオヒヤの騷擾は金口の心を痛く勞せしめたる爲に彼は其健康を害ひて少時病床に臥したるが、其病氣の快復したる後の約翰は以前に倍する熱心を以て牧會の勤務に從ひ、アンチオヒヤ教會は爾後十年の間日々彼の靈聖なる辯説と其教訓に俗することを得、約翰も益々深く聖書を究めて聽衆に其研究したる所を教へ、彼等をして人類を救贖するが爲に神の行ひ給ふ所の奇異なる行爲を悟らしめたり。約翰は又四邊の狀況及び四圍の諸事件に注意し何等かの紛擾若しくは驚くべく愁ふべき事件の人民の間に出來したりと聞くや彼は直に其事件を探りて己が説教の材料となしゝかば聽衆は群をなして彼の許に集り彼の説教を聞きて皆其心の騷擾を鎭め、其中に慰藉と教訓とを汲み取

りたり。されば世上の一顯象として最も些細なるものと雖約翰の心に反響せざるものとては殆どなく、アンチオヒヤ市を屢々驚かしむる地震、異教徒及び猶太教徒の亡狀、正教徒間の不和、富者と貧者若しくは奴隷と主人間の問題等凡て此等の物は直に機敏なる約翰の心に反應して聽衆の前の說教となつて顯れ出でしかば、彼の說教は聽衆の心に非常の興味を惹き起し、其言ふ所は如何なる無學の者にも一樣に解することを得たり。從つて當時の牧者と被牧者間の關係の親密なりしことは實に豫想以外にして其關係は確かに後來の牧者が採つて以つて牧會上の模範として學ぶに足るものあり、而して此關係に就きては約翰自身も亦詳かに說明する所ありたるが吾人は聖金口の人格と其アンチオヒヤに於ける勤務に一段の光彩を添ふるが爲に玆に少しく其關係の如何に美しかりしやを叙述すべし。

▲美はしき牧者被牧者の關係

牧師中の大牧師たる主嘗て教會に於ける牧師と教衆との關係の理想を牧羊者と羊に譬へて述べて曰く「善き牧者は己の羊を識り羊も亦彼を識り彼の聲を聽く」と古來よりの教會史を見るに此主の言を實現せんとして一生を苦みたる牧者は其數甚だ少からざるも吾人は未だ嘗て聖金口約翰の如く此理想を完全に遂行したる人有るを知らず、蓋し彼に在りては牧師と被牧者との心は宛も一體の如く牧者は被牧者の幸の爲には一身を擲ちて働き被牧者と牧者の爲には有ゆる精力を盡して惜まず斯くて彼等相互は牧者なくして被牧者の生活し能はざりしが如く牧者も亦其被牧者なくして一日も生存し能はず試みに牧者にして疲勞と不快の爲に其說教を數日間全廢し保養の爲に市外に出

でんか全市は宛も何等かの天災に遭遇したるかの如く驚ろき惑ひ此に反し約翰にして市に再び現はれて一度口を開かんか爲に全市は復活したるが如く嬉々として宛も陽春の廻り來りたるかの感あり。聖金口嘗て或旅行より歸り來りたる際教衆なくしては己が一日も生活し能はざる切なる感を述べて曰く「我が卿等と偕に居らざりしは僅に一日に過ぎず。されと我に取りては其一日は宛も一年の如く我は殆と物淋しき念に堪へざりき。宛も嬰兒の其母の手を離れたる時に母を慕ひ喘ぐが如く我も亦母の懷にも似たる卿等と相離れたる時此集會を喘ぎ慕ひたり」(ガラテヤ一一一講話)と又嘗て彼が病を得たる爲、止むなく數日家に籠りたること有りたるが其全快後彼は其教衆に告げて曰く「我今日卿等と再び相見ゆるを得て宛も遠き旅路より歸れるが如き感あり。如何に親しき友ありとも同じき市に居て然も互に相見ること能はずは

何等益する所あるなし、我我家に居ながら宛も卿等と數千里の道程を距りたるが如く一言をも交すこと能はざりき。我が苦悶の中に在りて最も大なりしは斯くの如き喜ばしき集會に臨み得ざりしことにして病氣の恢復したる今日に於て我が最も滿足なるは卿等の深き愛を受け得らるゝことなり、恐らく熱病の熱と雖も久しく相見ざりし友と相遭ふの希望の强きには如かざるべし。友なきものが其友を慕ふは熱病患者の清澄なる水を慕ふが如し」(才能の事を述べた る譬の講話第一)又嘗て約翰が身體の疲勞を養ふ爲に閑散の地に赴きたる事ありたるが其時彼の管下なる教衆は遙に手紙を寄せて其の歸京を懇願したるに、約翰は己が健康の尙優れざるに拘らず、直に其教會に歸り教壇に立ちて、述べて曰く「我が不在なる時卿等が我身の事に就きて慮りたるは眞なりや。我は殆と一瞬間だも卿等の事を忘るゝ能はざりき。宛も人の姿の美しきに魅せ

られたる者が何處に赴くも、其美しき姿を忘れざるが如く卿等の心の美に魅せられし我は何處に行くも卿等の事を忘るゝ能はざりき。又彼の畫伯が物の美しき點を採り集めて一つの畫を畫き上ぐるが如く我も亦卿等の我が物語に對する熱心と敎に對する熱愛と敎を傳ふる者に對する敬愛と其他の優れたる點を想ひ浮べ卿等の善行と美しき所をのみ選び出して卿等の姿を作り出したり、斯くの如き默想は卿等と相見ざる時に我が憂を和ぐるものにして、我は起き臥す時も働く時も靜かなる時も凡て家に在ると外にあるとを問はず、何處如何なる時も常に此默想を恣にせり。且つ我が夢も亦卿等の愛を夢み我は晝となく夜となくソロモンが「我眠るゝ、されど我心は醒めたり」(雅歌五二)と謂ひし如く殆と此喜しき想出に憧れたり……我れ卿等の督促に從ひ健康の恢復したる後卿等の愛を受けんよりは寧ろ健康勝れずとも卿等の許に

速に歸ることの可なるを思ひ卽ち茲に卿等と相見えたり」(悔改の第一講話)と己が心を管下の敎衆の爲に碎くこと斯くの如き者は眞に善なる牧師に非ずして何ぞや。

▲聖約翰聽衆の不謹慎を戒飾す

聖金口約翰は斯くの如く己が敎衆の願ふ所、望む所に對しては、殆ど己が健康をも顧みざる程に優しく其懇願を入れたるも彼等の輕浮なる言動に對しては些少も假借する所なかりき。嘗て己が力ある說敎を聽きたる敎衆が感極まつて當時の風により、拍手喝采をなしたるに聖金口約翰は嚴然として彼等を責めて曰く「我は卿等の拍手と喝采とを望まず。斯くの如き音響は我が最も厭ふ所也。我が切に願ふは卿等が我が謂ふ所を靜に聽き其訓戒を日々行ふてとなり……是こそ我が望む所

の讃詞なり……卿等は此處を以て劇場又は俳優部屋と思ふ勿れ此處は心靈の學校なれば、卿等は宜しく自らの行爲を以て己が教に忠なることを證明せよ。其時我は己が日頃の苦心の報を初めて受くべし」（馬太第十七講話末尾）と斯くの如き譴責は謂ふ迄もなく多くの人の心に添はざりしかば教衆の内には聖金口を謗り、教衆の心を亂す人多く起り、此等の人を鎭壓するには金口約翰も少なからざる時と力とを費したり。而して一度彼等にして前非を悔い改めて來らんか、金口は極て寛き襟度を以て彼等の罪を赦したり。されど不幸にして聽衆が一度彼の説教に冷になり、劇場又は遊戯場に赴くことに熱中せんか、其時の約翰の悲嘆や實に名狀すべからざる程なり。當時の浮薄にして、且何等の定見なき教衆に在りては斯くの如き事は敢て珍しきことにあらず。彼等の多くは一年間苦心に苦心を重ねて作り得たるものを、一日中に破壞し了る底の

最も變心し易き者許りなりき。彼等にして數日間聖金口の聲咳に接せざらんか、彼等は一種物淋しき念に襲はれて、金口の説教を一日も早く聞かんことを憧がるゝに係らず、一度市に前代未聞の競馬又は演劇の催されんか、彼等は須臾にして金口の事を忘れ、教會を捨てゝ全市を擧り其娯樂場に赴くを常とせり。されば斯くの如き教衆の浮薄にして何等の定見なきことに就いては聖金口約翰の悲み歎きたること甚だしく彼は屢々熱心に此事に激して叫んで曰く「我が今日迄勞したるは抑も何の爲なりや。我は種子を石の上又は荆棘の中に蒔きたるに非ざるか、實に我は我が勞力の徒然に歸したるを深く憾む」（十三講話第）と、されど更に聖金口をもて尚甚だしく嘆息せしめたるは教會内に於ける不虔の行爲なり。彼叫んで曰く、教會が一の劇場に化せりと云へるは決して譜告に非ず、蓋し教會に來る女を見るに其服裝は彼の市に色を競ぐ

女も尙且つ三舍を避くるが如き華美なる風を粧ひ爲に幾多の蕩子を教會に引寄せ斯くて女を誘ふ者の爲に教會は最も便利なる處となり、物を賣買する者の爲にも教會は市場よりも遙かに優れたる處となれり、又各種の風説は多く教會より發せられたるを以て一度教會に來らば、裁判所若しくは醫師の客待室に於て聞くよりも多くの新事件を聞知すべし……嗚呼是れ何たる事ぞ、斯くても尙忍び得らるゝや、我日々卿等が教會より有益なる教訓を家に携へ歸らんことを望み居れるに卿等は却りて大なる毒を身に受けて家に歸りつゝあり云々」(前書第三十六講話)と、されど斯くの如き遣責にして一度効果を奏せんか聖金口の不滿と憤怒は忽ち愛と寛忍とに變じ、其峻嚴なりし態度を改め怒を收めて輕擧せし己が心靈の子に向ひ謝罪せしを常としたり。彼述べて曰く「我は餘りに嚴しき遣責を爲せり、願くば我が罪を免せ、實に斯くの如き

事は悲める所の靈に屢々見る所にして、我が之を謂ひしは決して卿等を憎める爲に非ず。却て愛する卿等を深く慮りし爲也」(六創世記第二講話)と又時にはアンチオヒヤ民の輕擧盲動は金口をして殆ど忍び難からしめ、彼をして其教衆に對し激越なる憤怒の辭を漏したるも、其時の遣責中にも常に愛の響を失はざりしかば教衆は敢て不滿を抱かず、寧ろ謹みて彼の言を聞きたり。蓋し彼等牧師と教衆の間に在りては牧師は其教衆を愛する爲に其行を責め其教衆も又其牧師と親み居れるが故に、彼の遣責を甘じて聞き、斯くて彼等相互は遂に切り放し得難き愛と忠實とを以て互に結合され恰も二人の友の如かりき。聖金口の其教衆に對する眞面目にして深く且つ神聖なる愛は、決して世の民の長若しくは名譽を望む輩が己が權威を民に振はんが爲有ゆる詐謀を弄して人民の心を眩惑する所の虛僞なる巧言若しくは令色と日を同うして語るべ

きものには非ざりき。約翰には諂諛なく、其謂ふ所は悉く深刻なる眞理にして、彼は聽衆に愛の教を肺肝を絞りて談り、其教へ方の懇切なりしことは左の言によりて明かなり。曰く「我は常に卿等を我が心の中に銘記し我が思想と考慮は悉く卿等の爲に費さる、民の數は大なるも我が彼等に對する愛も亦大なり。卿等の救贖に對する我が顧慮を除かんには、我内には他に何等の生命もなし」(對する第九講話一)

▲貧者の父としての金口

聖金口約翰は主基督の御旨を宣傳する者たると同時に、彼は又主救世主が常に無限の愛を以て己の許に招き給ひたる惱める者と重荷を負へる者の事に就ては殊更に心を注ぎ彼の愛に滿てる心は常に弱き兄弟を顧みて宛も萬事に細心なる父親の如く彼等の心靈と肉體上の必

要なる物の缺乏すること無きや、其事に就き常に意を用ひたり。されば貧民にして非常なる困窮の情態に陷ることあらんか、金口は奮然として彼等の救助の爲に起ち、若し彼等の困窮が富豪の貪慾と壓制に起因したるものならば、金口は假借する所なく富豪を責めて其貪慾と壓制に就いて彼等をして一言の辯解をもなからしめたり。斯くの如くにして約翰の說教の中には時に貧民のことのみを徹頭徹尾述べたることも屢々ありしかば或者は彼を責めて彼は貧者に關することの外何等の注意をもなさず、一の教訓をも述べずとさへ稱ふるに到れり。斯る時には約翰は常に富者も貧者も其救はるゝ事は彼に取り均しく喜しき者なる事を述べ、其疑を解きたり蓋し彼が貧者を特更に慮りたるは牧師たるものゝ職責が啻に教衆の心靈のことにのみ止らず、其肉體の事にも亦大に其責任を有するもの有るが爲にして、且つ此くの如き責任

の牧師に在るべきは救世主が恐るべき審判の時に於て飢ゑたる者に食を與へ、裸なる者に着せたることと有りやと訊問さると言はれしに依りても知らるべし。されば我は屢々「貧しき者には物を惠めよ」と謂ふ言を繰返し且つ物を惠まざる者を常に責むるを止めざるべし」(前書四十三講話二)と云へり。實に彼は常に此言葉を繰返し終世貧者の父となり、而して彼が斯く貧者を惠みしことは今に到る迄眞の基督教徒の最上善行として後世の人々に其履行を促しつゝある所のものなり。

聖金口約翰の慈惠深きことは彼が其民の犯せる罪惡に對する處置によりても亦知らる。彼は偉大なる苦業者たるが故に凡ての罪惡を遣責することと強く此等の罪惡を滅亡する爲に彼等に對して戰を挑み、且つ彼は其管下の教衆の内外の生活を嚴重に監視し、苟も彼等の行にして教會の神聖を辱め又は基督教徒の義務に背くこと有らんには、彼等を

責むることと嚴しく時としては彼が述ぶる遣責の說教は宛も霹靂の如く其聽衆をして己が行爲に伴つて必然に下り來る恐るべき苦難を想見せしめ、彼等をして思はず戰慄せしめたりき。されと罪惡に對する斯くの如く强き憎惡は約翰に有りては只其罪惡の上に止りて決して罪惡を犯せる人の上に移らず、却りて罪惡に對する憎みの强き丈其丈罪人に對して多大の同情と愛とを注ぎ彼等を見ること宛も牧者が己を慕ひ來る迷へる羊を見るが如かりき。されば其遣責にして一度効を奏せんか、忽ち聖金口は其峻嚴なる語調を和げ、其口より愛の言を漏して彼の話題は無限にして廣大なる神の大御心に說き及び、神の前に在りては人の罪は宛も大洋に於ける眇たる一滴の水の如きものなることを說き諭せり。彼の最も愛したる言は救世主の所謂「人の子の來りしは人々の靈を滅さん爲に非ず乃ち之を救はん爲なり」(ルカ九五六)と謂へる一

句なり、金口は此言の意味を布衍して其教衆に如何に墮落せる人なりとも、再び起ち上り得ざる者は一人もあるなきことを述べ、而して此教を聖書中及び當時の世より適切なる例を引きて、其確なることを證明したり。彼嘗て語りて曰く「卿等は一淫婦にして能く諸の婦の上に秀で遂には諸聖人をも擯んでたる者ある事を聞きたりき。我が謂ふ所の婦は決して聖書の内に記されたる女には非ず、我が生れたる當時世に著しかりし婦の事なり彼は最も淫風盛なりしフイニキヤの市に生れて劇場に其身を置き舞臺に出でては女優の第一位を占め彼の名聲は遠くキリキヤ、カパトニヤの境迄轟きたり。彼は其一笑を以て數多の富豪の産を傾け貴族の子弟にして彼の爲に魔道に陷りたる者其數少なからず、人は彼を呼ぶに毒婦を以てし其人を惑すことに巧なるには何人も舌を捲く程なりしが彼は只に普通の人を惑すのみを以て足れ

りとせず、遂には皇后の兄弟をも己が藥籠中のものとなし、彼女の勢力には何人も抗拒すること能はざりき。然るに忽然として(我此事を如何に釋き明すべきや自ら知らず)彼の女の心機は一轉し神の恩寵を受くると共に今日迄の亂行を全く離れて己が行くべき道を天に向つて執るに至れり。斯くして嘗て其舞臺上に於ける亂行を以て他に比類なかりし彼女は、今や貞操の模範となり、身に毛衣を纏ひて悔改の涙に其生涯を暮し再び舞臺に出でしめんとせし縣令の勸告も彼女の許に使はされたる兵隊の强請も、遂に彼女の決心を飜して其隱逃所より彼女を引出すこと能はず、彼女は遂に聖機密に上り、神の恩寵によりて清められ最上の善事を履み行ひ、己を慕ひて來る參拜者にも會はず、自ら設けし禁獄の中に數年の月日を送りたり。斯く先なる者は後となり、後なる者は先とならん、希くば我等も他人が來りて我等の大なる者となり榮

ある者となることに妨げざる事を常に熱望すべし」（馬太四十七）と金口の此談話は罪人をして其失望と落膽より救ひ出し、神の仁慈を思はしめ彼等を勸なからず激勵したり。特に失望せる罪人に取りて救贖を得る餌となりしは聖金口の左の如き言なり「爾罪人なるも失望することなかれ我爾等を絶えず治療すべし、蓋し我は惡魔に刃向ふに足るべき武器の如何なる者なるを知ればなり、爾罪の内に包まるとも望を失ふて勿れ我常に下の如き言を繰り返すを止めず」曰く「日々罪を犯さば日日悔い改めよ……爾罪に泥まば悔改を以て己を新しうせよ。爾若し悔改をもて救贖を得能ふやと、問はゞ我は勿論其出來得を答ふべし人若し其一生を罪の内に送り而して後悔改したらば如何、果して救はるゝや、然り救贖を得べし蓋し神の慈憐は量り難く其仁慈は極りなし、如何なる罪惡と雖人の行ふものなれば自ら限りあり只神の寛き仁慈には

限りあることなし、試に思へ大海の具中に落ちたる一光花は海の内に在りては尚ほ光を保つや否や、人の罪の神の仁慈に於ける恰も小さき火花の大海に落ちたる時の如し、否神の仁慈は大海にも優りて更に大なり。蓋し海は如何に大なるも限あり、惟り神の仁慈には極りなし」（悔改こと八講話）と

▲平和を宣傳する天使

聖金口約翰は人の罪を寛容する憐深き傳道者たりしと共に又平和を宣ぶる牧者なりき。彼は不和と岐教とを忌むこと甚だしく當時アンチオヒヤ教會の信徒間に蟠りたる不和は彼の心を最も痛ましめたり。されば彼は其説教中に屢々此事を述べ不和の起る原因は決して宗教に熱心なるが爲に非ずして多く利己主義と權勢とを望むが爲なること

を說きたり。彼曰く「未だ嘗て權勢を慕ふ事の如くに敎會內を亂すもの なく又敎會を亂す者の如く神の怒を蒙むるものなし、設し我等如何なる善事をなすとも不和を釀さば我等は神罰を逃るゝこと能はず……斯くの如き罪は死も亦其を償ふこと能はず。卿等が主の爲に苦みを忍ぶは主耶蘇基督の榮の爲に非ずや。然るに卿等は一方に於て己が生命を主に捧げ他方に於て主が死を以て建て給ひし敎會を掠奪しつゝあり」と彼は實に斯る敎訓を以て敎會內の分離を鎭め敎會內の黨派を互に融和せしめ、其不和を絕ち敎會をして最も樂しき時代に遭遇せしめたり。

▲聖書註釋者としての金口

聖金口約翰は斯くの如く其敎衆と最も親しく生活したるが敎訓と評

論に關する彼の著作の重ずるものは實に皆々此時代に執筆せるものなり。彼が間斷なくなせる其敎話は新舊約聖書中の或一章又は或一句を解釋するのみに止らずして、時には其全卷をさへ解釋したるが、此等の註釋は悉く彼の聖書註釋者としても亦非凡の技倆ありしことを證明するものなり。

聖金口がアンチオヒヤ市の敎會に勤務中に執筆したる著書は左の如し

舊約聖書中其全卷の註釋をなしたるものは「創世紀の註釋」「詩篇の註釋」「以賽亞書」「耶利米書」「哀歌」「以西結書」「但以理書」「十二小先知書」

新約聖書中にては彼の註釋書中の冠たる「馬太福音註釋書」「約翰福音註釋書」「使徒行傳」「羅馬書」「哥林多書」「加拉太書」「以弗所書」「腓利門書」「提摩太書」等の註釋にして其他聖書中の或一章又は或一句を註釋したるものも亦尠からず、就中有名なるは「悔改に關する講話」にして當時の執筆に係る評論に於ては「アノメイ敎を駁す」の一篇最も著名なり

彼の註釋は明瞭にして複雜ならず其文は活氣を帶べるを以て他の多

くの註釋書の模範となり、神學上の智識と宗教道德上の教訓は其内に溢々として盡きざる泉の如く湧出す内にも「馬太福音の註釋聖使徒保羅の書冊の註釋は他に類なき註釋書と稱せらる聖金口は其註釋に於てアンチオヒヤ學派に屬しアレキサンドリヤ學派の稱ふるが如き祕密主義を採らず悉く聖書を其字義通りに解釋したるが故に彼の註釋は此點に於て註釋中最も瑕疵なきものと稱するも敢て過言に非ず、且つ彼は又アレキサンドリヤ學派の學説をも究め該派中の名註釋者オリゲンの如きは彼の最も好んで研究したる所なれば聖金口の解釋は實に教會に於て聖書を註釋する綱領と理想とを併せ有する好註解書たるを失はず。彼が聖書を註釋する方法を見るに先ず初めに聖書の各句に就き其最も自然なる意味を述べ次に定理上に係る教義を其内に需め然して後其教義を實際に應用し之より生ずる善行を常に指摘せ

り。彼の註釋は悉く肺肝より自然に流れ出でたるものにして其教訓は直に人の生活を高尚になし神聖なるものに化せしむるが爲になされたり。彼金口は決して書齋に籠りて註解を書かず。會堂に立ち民衆に向つて口づから活ける言葉にて聖書の解釋をなしたるが故に彼の解釋たるや活氣と生命に富み聽衆の心臟を深く抉り、其言は實に熱火の如く人心の堂奥を燒き盡す力を有したり

▲聖金口都に召さる

聖金口約翰はアンチオヒヤ教會に職を奉ずる間其教衆と最も睦じき月日を送り、彼の思慮は只如何に、せば最も善く又力强く教衆を教訓し彼等の迷夢を醒し、彼等に主耶蘇基督を信ずることが諸善行の源なることを説き得べきか其にのみに苦心し、此事を除きては彼は他に何等

の目的もなく彼は其一生を彼等の内に送らんと決せり。されば彼の教衆中無智にして輕薄の行をなし其爲に聖約翰の心非常に悲む時には彼は其憂に沈める目を擧げ、繞れる山を遙に望みて嘗て若き日に於て其處に苦行したることゝ靜なる自然の懷の中に神と親しく康かに又喜しき生活をなしたること、及び彼が稱して地上の天使と稱へたる多くの苦行者が其處に彼と均しき生活を送りたることの思ひ出に耽りたり。聖金口は時として日頃の疲勞を休め、煩雜なる此世の俗事より脫して心を清淨にするが爲に彼の慕へる此山に暫く身を置きたることゝ有りたるが斯る時にも彼は其教衆を長く相見ずして其日を送ることゝ苦しく須臾にして歸り來り衷心より述べて曰く「我此處を離るゝ能はず我は終世此處に留らんことを望む」(コロサイ第七講話の三)と。聖金口がアンチオヒヤの教會を慕ふこと夫れ斯くの如く深かりしと雖、神の御旨は此大

傳道者を僻陬なる此地に長く留らしめず、神が嘗て曠野の内より引き出して人跡多き町の教會の臺上に揭げたる此大光明は此小さき町の爲には餘りに强くして其光は優に全世界をさへも照すに足るべきものなりしが故に此光明を高く捧げて基督教世界の中心に置くは極めて必要の事なり。茲に於てか君斯旦丁堡駐在大主教ネクタリイ師が三百九十七年に高齡を以て永眠すると共に其後繼者として神は聖金口を其座に上らしめて以て彼をして偉大なる聖人及び義の爲に苦む偉大なる致命者たらしむるに到れり。

▲大主教としての聖金口

聖金口約翰がアンチオヒヤ教會の牧師職を退きたる時は世界の政治界に於ても亦非常なる變革の生じたる時にして降生三百九十五年皇

帝へオドシイの崩ずると共に、羅馬帝國の國威は全く地に委し了り、彼にはアルカヂイ及ゴノリイと稱する二人の皇子あり、たりと雖其一人も此衰勢に傾きたる大帝國を一身に引受けて衰勢を挽回するに足る偉大なる才智を有せず、されば皇帝へオドシイは尚存命中後來此二人の兄弟が互に不和を釀さんことを憂ひ羅馬帝國を二分して東部羅馬をアルカヂイに西部羅馬をゴノリイに與へ彼等を別々にして其所管の地を治めしめたり。されど彼等は年尚若く加ふるに斯る大任を盡し得難き無經驗の者なりしが故に從つて國家の政治は彼等より出でずして彼等に侍する家臣の悉く支配する所となり西部羅馬帝國に於ては彼の有名なるスチリボン將軍此が實權を握り、東部羅馬帝國に於ては宮廷侍官エフドロピイ其權柄を恣にしたり彼エフドロピイは素と人の奴隷たりし者なるが或機會より遂に宮廷内に入り、其得意の奇才

によりて皇帝へオドシイの寵を蒙り皇帝が臨終の際には彼より親しく後事を托され彼の死後若き皇帝アルカヂイの後見となりて帝國の政治を其手に左右する者となりたり。此侍官こそ實に神の聖旨の利用する一の要具となり聖約翰を君子旦丁堡の主教座に就かしめたる原因となれり。大主教ネクタリイ歿するや彼の後任に關する議論四方に起り、其後繼者を決定すること容易ならず、蓋し其地位非常に好くして競爭者夥しく爲に皇帝アルカヂイは其中の誰を選拔すべきかを迷ひ殆ど途方に暮れたり。後遂に意を決して此を侍官エフトロピイの決定に待つことゝせり、エフトロピイは宗教に對し多大の好意を有し且つ教會の事に關しても少なからざる興味を有し居たるが故に屢々聖金口の説教を教會に赴きて聽き彼に關して常に感激し居たる所なりしかば、今皇帝より此委任を受ると均しく彼は此大説教家が都會の主教

として好個の適材たることを認め皇帝アルカディイに向ひ聖金口約翰を君斯旦丁堡の大主教に推薦したり。されば皇帝は直に縣令アスティイに命じ約翰をして君斯旦丁堡に轉任せしめんとしたり。然るに此不意の命に接したる聖金口の驚愕は謂はずもかな、アンチオヒヤ市民の激昂は實に非常の者にして若し強て彼等より約翰を奪はんか叛亂をも仕兼まじき形勢なるより、縣令は遂に詭計を以て約翰を奪取するに決しアスティリヤは人を約翰の許に使はし市外に葬られたる致命者の合祀をなすと稱し約翰を市外に誘ひ、車を以て彼を君斯旦丁堡市に携え來れり。彼等に欺むかれし聖約翰は途中に於て其詭計に陥りたるを悟り年久しく住み慣れしアンチオヒヤ市を顧み彼を慕ふ教衆の身を想ひ起し。少からず悲みたるも又神の聖旨の在る所を忽ちにして悟り其境遇に安んじて靜に君斯旦丁堡市に赴きたり。皇帝アルカディイは聖約

翰の上京せるを聞き喜んで彼を迎へ、其叙聖式を盛にするが爲に、多數の主教を都へ集め歷山亞の府主教へオヒル師主座となり三百九十八年二月二十六日聖金口約翰を君斯旦丁堡の大主教の位に叙聖したり

▲君府に於ける大主教座

今や約翰は既に一村落の平凡なる牧師に非ずして、彼は實に大都市の大主教たり、帝都の府主教たり、彼の位は羅馬府の主教と相併立せる高貴のものとなれり實に彼の位が然かく高貴なるものとなると共に、彼の勞力も亦此が爲に前日に比して甚しく增加したるを認む君斯旦丁堡の教會は傳說に據れば初め聖使徒アンドレイによりて基されたるものなるが、爾來幾多の變遷を經てビサンチア市が、東方帝國の首都に昇ると共に、此教會も亦其資格に於て東帝國の首位を占むる大教會と

なり、宗教上の各種の事件の焦點となり、從つて其勢力も他教會に秀で、強く其一擧手一投足は悉く他教會の模範となれり。

▲君府に於ける教界の混亂

帝都の中には數多の邪教あり、彼等は快樂を之れ事とする無智者より宮廷に出入する宮内官の間に迄蔓延し、中にもアリイ教の勢力に到りては、全く正教を壓し金口の先輩なる神學者グリゴリイの時代に於ては君府中に存在する重要なる十四の聖堂は皆アリイ教徒の手に落ち、正教は纔に一の私宅内なる聖堂に閉ぢ籠り、其聖堂が善牧師の指導の下に正教を復興し、其勢力を挽回する策源地となりたるが如き悲しき運命に際會したり。其後に到り正教の勢力は漸く復活し來りたりと雖、邪教の勢力は尚侮り難く神學者にして大主教たるグリゴリイさへ心

靈と德義の荒れ寂びれたる教衆を牧する事容易ならず。之が爲大主教の位に上りたる後時を經ざるに早くも其位を退くの止むなき次第に立到りたりグリゴリイの後繼者は宮内官吏より出でたるネクタリイなりしが彼は正教に對しては熱心なるも帝都に駐在する主教として は、餘りに貫目なく其主教座に在る間は、爭鬪なく紛擾もなく極めて靜謐なりしとは云へ帝都の教會は今少しく萬事を嚴格に持する元氣ある牧師の來り教會の威信を示すあらんことを望み居たり、實に當時の事情は確に斯くの如き人を要したり、主教ネクタリイは元氣なく、彼の死後教會は全く無秩序の狀を示し、快樂と慾望のみに耽り居れる教衆は己が牧師を尊敬せず、主教其者迄も世俗と一般なる生活を營むが如き有樣を呈したり、斯くの如き現狀は聖金口約翰を悲ましめ、又激せしむる事甚だしかりき、金口が前任地たるアンチオヒヤ市に於て認めた

る罪惡と缺陷は、只無智なる教衆の間に存する者にして、之が滅却には牧師側の奮勵を要し、彼は實に之が爲に非常の努力をなしたるが、君斯旦丁堡教會に於ける現狀は、教衆のみならず牧師其者の改善と懲罰とを要する有樣なりき彼は此難局に座して初めて自ら神の攝理の意の有る所を解したり、蓋し彼尙未だ幼かりし時彼は主教職が如何に高貴にして、其勤務の如何に困難なるかを察し其友ワシリイを離れて主教職に就く事を避けたる事ありたり、然るに今や彼は其望む所に反して、首席なる教會の主教に任せられ、其職に對する困難を覺ゆる事切なる者ありしが、今日の金口は既に其困難を避くるが如き事なく却つて彼は此高貴にして困難なる職に卽き教會の牧者として如何に己が其職に適せるかを世に示さんと考へ、勇みて其職に就きたり。

▲「善牧師」たる聖金口

金口約翰が、赴任後先づ第一になせる行爲は、己を「善牧師」として其教衆に模範を示せる事なり彼を迎へたる教衆の彼に對して期待せる所も亦實に其事なり。蓋し教衆は彼が如何に光輝燦爛たる能辯を有せるかは業已に悉く知り居たる所なりき各人の豫期せる所に違はず君斯旦丁堡に於て開かれたる聖金口約翰の第一回説教會は無數の聽衆を以て充されたれば金口自らは彼の管下なる教衆の如何に神の言を聞くに熱心なるかを之によりて知り其衷心喜びを禁じ得ざりき見よ金口の口よりは神的力ある黃金の如き辭句迸り出で之を聽ける聽衆は明記すべからざる快感に打たれ聖堂の內は雪崩の如き拍手と有ゆる讚美の聲に騷然又雜然たり。聖金口の嘗てアンチオヒヤに在るや彼の説

教毎に斯くの如き讃美の有樣を見て之れ全く俗世界に於ける讃美の方法にして説教に不適當なりと

アンチオヒヤの教衆に訓戒を加へたり今君斯旦丁堡に於てアンチオヒヤに於けると均しき此有樣を見ては默然たる事能はざりき。拍手及び讃詞に對する彼金口の不快は彼の説教に對してなす拍手が何等彼の教訓の心に銘したる證據に非ずして、彼の説教に對してなせる教衆の讃詞と拍手が劇場に於て彼等のなす讃詞と異るなく且つ君斯旦丁堡の教衆は、アンチオヒヤの教衆より更に説教を馬耳東風に聞き流しつゝありと知るに到り、一層甚だしくなりたり蓋し君府の聽衆は金口の説教を其内より教訓を得んとて聽くに非ずして、彼の能辯を耳にせん爲に集りたり。茲に於てか金口は斯くの如き惡弊を矯めんが爲に、アンチオヒヤに於て採れるよりも一層斷乎たる所處を採らんと考へ彼は其説教の内に於て、屢々斯くの如

き惡習を廢して常に沈默し襟を正して己が説教を聽かん事を聽衆に求めたり。彼は常に語りて曰く「希くば靜に我が語る所を聽け」と我諸子に願ふ、若し諸子にして承諾するならば今日より下の如き一の規定を設けん卽ち此後は何人も説教する時に當り、説教する人の言ふ所を妨げざる事なり……希くは茲に我が願ふ所を行ひて、幸福と智識の根元と基礎とを捕へよ。世の學者さへ生徒の前にて教授をなすに當りては生徒の拍手して其言ふ所を妨ぐる者なきに非ずや我等は聖書を讀みて未だ嘗て聽衆が聖門徒の説教せし時に當りて騷然たる拍手をなして彼等の説教を妨げし事あるを知らず、主基督は山上に於て民に説教したりと雖彼が語る時に當りて何人も叫びたる者あらざりき、教會に執りて最も好しく最も適しきは靜謐なる事と溫順なる事なり、騷擾の音と叫喊の聲は劇場浴場、公會堂及び世俗の諸祭禮に附屬せる者也、我

等の教義を述ぶる時に當りては、平和と熱心と彼の大浪と暴風とを避けたる港灣の内の如き靜謐を要す我諸子に望み且つ懇願す希くば我が言ふ所を考慮せよ……我嚮に語れるが如き一の規定を設け神の榮の爲に之を守れよ」(聖使徒行傳に關する一講話)と斯くの如く聖金口は熱心に彼教衆に訓戒を施したるも惡習に深く浸潤したる都人士には、何等の効をも奏せざりしかば茲に於て約翰は教訓のみに賴らずして、自ら嚴正なる生活を營み以て世に模範を示さんと決意し教衆の放埒なる丈け其丈け牧師の嚴正を示さん爲に殆ど自己を捨てたり君斯旦丁堡の大主教の職たるや同首府の社交場裡に出入する要あり屢々貴顯の宴席に招かれ自らも亦客を招待する事多く之が爲に教衆に盡すべき時間を割かるる尠からずされば金口は此等の事に關して自己を全く社交の圈外に置くべき必要を認め先づ凡ての招待を固辭して自己の生活を隱

遁者のなすが如き有樣に變じ、粗食を食ひ、常に獨居し、斯くして自己の收入の内より殘し得たる金員は、之を慈善と善事に使用したり。彼の住居の門は常に閉さず、晝夜の別なく開かれたり。されどそは世の虛榮者を歡迎し其社交を賑し彼等の名譽心を滿足せしむるが爲にあらずして開かれし門は全く心と肉體に對して扶助を熱望せる惱める者と重荷を負ふ者を歡迎するが爲なり。聖金口の嚮にアンチオヒヤにあるや、彼は貧しき者の友にして、其扶助者たりしが、今君斯旦丁堡の主教座に在りても彼は依然異る所なかりき。都市は宮殿と離宮と其他の華麗なる光景に燦爛たりと雖、其裏面に於ては貧を訴ふる者夥しく、其度合は遙にアンチオヒヤを越え居たれば、聖金口は自己の教衆中に在る斯くの如き悲慘の者に對し、先づ扶助を與へんと志したり。卽ち金口は大主教座の爲に定まれる收入を極端なる節約を行ひて可成的多く剩し、之

を慈善事業に轉用したり、金口の尙ほ君府に來らざる以前に於て、同都市には四ツの慈善事業ありたりと雖彼等は孰れも極めて微々たる者のみなりき然るに約翰が一度牧會の業に從ふや此等の事業を根本より整理し秩序を立て全く新生命を之に與へたれば、教會を中心として早くも各種の慈善事業勃興し病める者力無き者、世に入れられざる者、及び凡て貧困と、人の世の殘忍なる行爲によりて、失望せる者は、其處に來りて慰安と隱家を見出すに到れり。實に當時に於ける聖金口の全努力は主として此慈善事業に注がれ。彼がなす說教には慈善を以て天堂に達する最善の善行なりとして讃美し聽衆に喜捨をなすべく慫慂したり。斯くの如き彼の努力は空しからで、君斯旦丁堡市に間もなく慈善的行爲勃然として起り、富豪特に寡婦の中には慈善事業の爲に、己が財產を擲ちて自ら起ちて病者と惱める同胞の爲に盡せる者も亦尠から

ざりき。悲善事業の此の如き勃興は大牧師たる金口を喜ばしむる事甚だしく、彼は竊に其牧群の中に近く貧困の者無くなりて、教衆は各自隣人を扶助し、斯くて其昔耶路撒冷に於て、初代の基督教徒が生活したるが如き、幸福ある共同的生活時代の來るべき事を夢みたるなり。（馬太福音書講話參照）

▲聖金口驕奢の風俗を嚴責す

されど、聖金口約翰の牧會的勢力は獨り慈善事業にのみ止らず、之が根元たる心靈上の教養にも亦及びたり。君斯旦丁堡の市たるアンチオヒヤ市以上各人物の雜居せる所にして、其數に於てそ基督教徒は市に多數を占めたれ共、彼等の日々異教に接する機會は、極て多く市中には異教は有ゆる妄信の形を帶び存在したり。加ふるに希伯來民も亦異教

徒と共に軒を並べて住ひ、彼等は公然と基督教と戰ひをこそせざれ共陰に基督教を排斥せんと計り、基督教會其者の中にも、亦各種の異端と岐教の爲に甚だしき動搖を見たり。人種と信教の混合に起因せる此等牧會上の困難と同時に、亦世俗の惡慣習は聖金口を甚だしく苦ましめたり。嚮に君斯旦丁堡の宮廷は善事の模範となり、各地方は其の跡に習ふが如き有樣なりしに、今や宮廷は一般社會及び家庭の模範とならず却つて惡德の源泉となり、此等の惡德は宮廷を周る社會を荼毒する有樣を呈するに到れり。卽ち宮廷に於ける驕奢は宮內官の驕奢となり宮內官の驕奢は人民の課稅を重うして其持有を挽取るが如き結果を顯し來れり。斯くの如き情態は、常に貧困者の爲めを慮る金口を甚だしく激怒せしめ、彼をして其說教の內に斯くの如き行爲の不德なる所以を叫ばしむるに到れり。彼は無思慮なる奢侈が基督教徒たる者の行に適

はざる事を語りて曰く、諸子は何の必要ありて絹布を身に纏ひ、黃金製の金具を以て裝飾したる驢馬に跨るや、驢馬は蹄の先より頭迄裝飾せられ、彼を覆ふ布は黃金もて裝はる。何等の智なき驢馬は高貴なる物品と、黃金製の銜を身に着けたり、獸は斯くの如く尊き品もて飾らるゝに係らず、貧しくして飢ゑ疲れたる人の子は諸子の門に立ちて憐を乞へり。主基督は飢ゑたり、あゝ無智の者よ、若し諸子の門に基督が貧しき者の形をとりて立てりとせば、諸子は如何なる言を以て自らを辯護し亦其罪を謝するや、あゝ諸子は自ら顧みて悟る所なきか」（詩篇の說教四十八）と時代の風潮は、遂に貧者も富者も一樣に劇場と娛樂場に向つて傾倒し、會堂は常に空虛にして劇場は常に觀客を以て溢るゝ如き有樣を呈しぬ。成聖者たる金口にして此情態を見て如何で悲まずして居らるべき。彼は無智なる教衆を嚴責し彼の一場の講話は深刻なる感動を聽衆に與

へ、爲に教衆中には彼の面前の其惡習慣を悔改し來る者さへ生ずるに至り、彼は僅に慰藉を得たり。

▲教職腐敗の原因

聖金口は啻に教衆の德義の廢退と惡癖に悲憤の眼を注ぎたるのみならず、更に教衆を牧する教職の腐敗と墮落に對し憤激したり。嚮にも記したる如く、當時の修道生活に入りし主教なる者は、多く俗人と選ぶなき生活を營みたれば、主教に隷屬する下級教役者が、其風に習ひて俗的生活を喜ぶは寧ろ已むを得ざる事なり。彼等の生活は殆ど俗人との間に何等の區別なく、時には其道德上非難すべき點をも認むるに到りしかば、金口の憤慨する蓋し當然の事なり。特に金口の不滿を感せしは當時廣く世に行はれたる教役者が童貞を守れる婦人と同一に住居せる

事なり。此風たる素は善意の目的に出でたる者なりと雖も後に到りて各種の弊害を醸すに到れり。蓋し當時教役者間には、獨身生活は教役者に取りて最も適應せるものにして、各種世俗の煩を避けて彼等の行動を自由ならしむる者なりとの說、一般に尊まれ、司祭並に其他の教職に在る者の中獨身生活を送れる者も尠からず。而して彼等は慈善の意味を以て其自宅に貧困なる孤兒を養ひ、其孤兒等の內には往々獨身の誓を立つる者ありたり。然りと雖、當時代に於ては尙婦人の爲に設けられたる修道院の完備せる者極めて尠かりしが故に彼童貞を誓ひたる孤兒等は長ずるに及びても尙其養育者の許に留り居たれば獨身を誓ひたる男女は同一家屋の內に宛も弟妹の如く同居する有樣を呈せり。彼等は同棲すると雖、常に嚴格なる訓練を受け居れるが爲に、當時の世間が疑ひたる如き極端なる弊害は是なかりしと雖、斯くの如き秩序なき

顯象は、やがて都市に風をなして、遂に腐敗を招く原因たると共に亦實に教職間に各種の弊害を醸し始たるを以て、斯かる風は須く根絶して神品の威嚴と感化力とを高くする必要あり、茲に於てか、金口は立ちて此不法なる同棲制度に痛罵を加へ、此制度を排斥したる二大著書を公にしたり。

▲女修道院の建設

斯くの如く、惡風は深く社會に蔓り一時に之を根絶する事難かりしも金口の不斷の努力は、己が教會を著しく廓清する事を得たり彼は先づ修道的生活の如何なる者なるか、此が好模範を世に示さんが爲に女子修道院の建設を志したり。蓋し彼以前に於ても、修道院は世に存在せしと雖、同處は祈禱をなし、救贖の道を講ずる處と思はれず、單に世の生活

に疲れたる人が、世と全然關係を絶たずして、一時休息を貪る場所と思惟されたり。されば金口は此等の修道院を根元より改革すべく、自ら修道院に臨み多くの修道士に向ひ、若し修道士にして己が靈の救贖を計る考を以て院に起居せず、常に心中にて潔齋と祈禱の事を考へずして、公衆浴場の快樂と衣服の美と各種の快樂の事にのみ憧れ居らば、寧ろ修道院を捨てゝ社會に復歸する方可なり。蓋し修道院は祈禱と潔齋と悔改を專心なすが爲に設けられたる所なりと教訓したり。金口が斯く嚴格なる法を以て修道院に向ひたる結果は、さしも腐敗せる修道院も形全く新まり、修道士として不適當なる人物は院内より淘汰され、誠に己を神に其友の爲に捨てゝ衷心より世俗を超絶せる平和を心に求むる人のみ修道院に留るに到りしかば、金口の喜びは此上なく、斯くて聖金口の叫びに地位あり、富ある紳士富豪の寡婦も亦應じて起ち、己が生

命と財産とを貧しき者惱める者の爲に獻ぐる者さへ出づるに到れり。此等富貴の寡婦は、基督に依る兄弟姉妹の苦める者惱める者を助くるに際し、便宜多からんが爲に屢々女補祭の職に就けり蓋し女補祭の職たる主として教道に進みつゝある女子を教へ彼等に洗禮を授くる準備をなし、彼等の心靈上の更生に關する慮りをなす外、主として女子と小兒に關する教會の諸事務を掌るべき者なり、されば女輔祭の職は決して容易なる者にはあらざれ共、此職を奉じたる貴婦人は能く此困苦と戰ひ、終生其職に殉じたる者さへあり、そが中にありて最も金口時代に於て名望あり、秀でたる者はニコミヂヤ出身の一貴婦人にして、幼時より神の爲に一身を獻げたるニガレタ孃、マウリタンの王族たるシルビナ夫人、著名なる一將軍チマシイの未亡人、ペンタヂヤ夫人及び皇帝ヘオドシイが垂涎したる程の巨萬の財産を悉く教會の要に獻せし敬

虔なるオリンピアタ夫人等なり。以上述べたる如き女輔祭等は、實に聖金口が、其拔群に對して爲せる心靈及び物質上の各種の事業に對し中心となりて、彼が事業を助けたる人々たり。

▲異教禁滅の運動

聖金口は其所屬教會の腐敗と戰ひたると同時に亦正教を異端と岐教の侵略より防禦せざる可からざりき。當時君斯旦丁堡市に於て最も勢力ありし岐教は、西方の國より傳播し來りて君府に本據を作りたるノバチー教なり。彼等は自ら己の教派こそ眞の教にして純潔なるものたれば己が教派を措きては他に不潔分子を容認せざる眞正の教派なしと語り居たり。聖金口は此驕傲なる言を聞きて憤怒する事甚だしく彼は述べて曰く、あゝ傲慢にして如何に無智なる卿等は人として自ら罪

なしとするか、卿等は大海に全く波なき時ありと速斷する輩なり。蓋し波濤の大海に鎭る事なきが如く、罪惡も亦我等の中に絶滅する事なしと。聖金口はアリイ教に對しても亦擯からず心を勞したりき當時アリイ教は神學者グリゴリイの時代に於けるが如き勢力なかりしと雖、首府の市外には尙餘力あり、動もすれば再び首府の中央に顯出せんとする形勢あり。特に彼をして勢力を得せしむるものは、アリイ教の讃美歌を聲高かに歌ひつゝ町を練り行く行列なり。無智なる正教徒は、此行列を見て好奇心に驅られ、其行列に馳せ加り、遂にアリイ教を奉ずるに到りしが、聖金口は之を最も遺憾なりとなし、之を防ぐ一手段として正教徒の爲に、聖歌を唱ひて市を歩く行列を編成するの必要を認めたり。彼の案出したる此行列には其後皇后エウドクシヤも亦干與するに到り彼皇后は此行列の爲に其御手許金を割きて蠟燭を寄進したり。然るに

不幸にして此行列はアリイ教の行列と相會したる時兩者の間に激烈なる爭鬪起りて多くの死傷者を生じ帝室附の一官人ウリウンの如きは爲に石を以て頭部を割られ即死するに到りしかば遂に政府の爲に禁止せらるゝに到りぬ。聖金口の企ては不幸にして斯くの如く失敗せしも彼は聖歌の基督教徒を教へて基督教の眞生活に入らしむるに力あるものなる事を認め之が爲に屢々宗教的集會を設け亦初代の基督教徒の行ひたる事跡に習ひ晩課の祈禱式を復活せしめたり。彼語りて曰く「夜は寢ね休む爲にのみ造られたるに非ず神の教會は夜半に起るべし、起き出でゝ星の謠ふ歌を聞き其深遠なる沈默と限りなき靜謐とを觀察し汝が主なる者の攝理の前に俯伏せよ。心靈は夜間最も淸く最も輕く、纔の努力によりて之を擡るを得べし。靜謐と壯嚴なる沈默は心靈をして透察力に富ましむ主基督が山に夜間を過し給ひし目的は我

等をして其行に倣はしめん爲に非ざるか綠の樹の香は夜流れ卿等の心靈は樹々にも優りて天より降る露を蒙るべし、晝間日光を以て燒かれたる者は夜に入りて新になり、生力を回復すべし(行傳に關する講話)金口の斯くの如き教訓は好結果を奏し教衆は夜間の祈禱に慣れ其を好むに至れり。都會に生活する市民は柔弱にして長き祈禱式を好まず。されば金口は其弱き配下の者に對し臨機の處置として短縮せる特別の奉神禮儀を編纂したり。此禮儀は其當時より正教徒の用ふる所となつて今日に到る迄金口の禮儀と稱し、教會に於て施行せらる(聖金口禮儀は決して新に創作されたる者に非ず。只時代の要求に應じ、大ワシリイの禮儀を簡略にせる者なり)聖金口約翰は君斯旦丁堡教會の內外の諸弊風を改めたる後基督の正教を未だ其を知らざる者に知らしむる傳道を開始したり。背教者ユリアンの死後異教は其中心點を喪ひて事實上影を

潛めたりと雖其命脈は絕えずして時を經ると共に再び焰を出す虞あり加ふるにユリアンの後繼者は異教を再興する妄想を捨てず彼等は何時かは再び古き諸神が勢を得て基督に打勝つべしとの說を眞面目に信じ居れり。異教を布教する傳道師共は古より傳れる豫言に基督教の進步は四世紀にして止り、四百年後には基督教は見苦しき失敗をなし異教は勝利を得べし。基督教の一時盛なるは妖漢彼得の欺瞞に依ると愚民の間を說き廻れり。されば此說に迷されたる愚民は其定まれる時期の到來する日を待ち居れる有樣なりき。異教の趨勢斯くの如き時に際し、恰も好し皇帝フエオドシイの諸王子は眞の宗教に熱注し中に西羅馬の皇帝たるゴノリイの如きは異教を根絕せしむるが爲に斷乎たる手段を講じ爲に前に記されたるが如き迷信を著しく滅却せしめたり。異教は東帝國に於ては尙自由を得たるが爲にシリヤ市の如き

は公々然として彼のアイユム祭此祭はガザ近傍なる異教の一神社の名より來れり)を行ひ人民は淫慾を恣にしたり。此祭禮とバール及びアスタルタの神を祭る祭禮とは再三再四禁せられし所にして最初にコンスタンチン大皇帝の嚴禁したるをユリアンの世になりて再興しフエオドシイの時になりて再び其を行ふを禁じたるに意志の薄弱なるフエオドシイの子アルカヂイはシリヤ人の不平を恐れて又も其祭禮を許可し爲に祭禮は遂に公然と行はるゝに到れり。聖金口約翰は尙アンチオヒヤに在る時より、既に此祭禮に關しては常に反對し居たるが今君府の大主教たるに及びて此惡祭禮を根絶せしむるを忘れず彼の努力の結果は遂に此マイユム祭に嚴禁さるゝに到れり。聖金口は此機會に於て異教が唯一の避難所と賴めるヒニキヤ市に向つて異教退散の運動を開始し進んでアンチオヒヤ及び亞歷山市に及ぼし其地方より異教を驅逐する事業を其死に到る迄繼續したり。

▲蠻民間に於ける傳教

聖金口はヒニキヤに對する傳教と同時に、更に進んで當時漸く頭を擡げんとしつゝある野蠻民の間に基督教を傳播せん事を考へたり。蓋しヒニキヤの民たる既に其全盛期を經過せる人民なるが、之に反し此等蠻民は尙年少にして彼等に基督教の光明を與ふるは極めて緊要の事に屬せり。彼等蠻民は常住の如何に幸福なるかを知らず、常に天幕に住ひて居住を變じ時に隊伍を組みて移住し近隣の人民に恐慌を與ふる事尠からず而して此等遊牧民は概ね覇氣に富みたるを以て古代羅馬希臘に代りて新世界を形造る能を有せり。されば多くの人の中には彼等を見て以て人道の敵となせる者ありたりと雖聖金口の彼等に對す

る考は全然異り彼等を以て神の子とならざる可からざる自然の愛兒なりとなせり。聖金口の殊に注意を拂ひたる蠻民は北國に居住せし「スキフ」の族なり同族はドン河の傍及び其北東及び今の露國々境の邊に多く住居したり。聖金口は同種族を稱び「アマクソヴイ」即ち天幕に住居する者と云ひたるが此未開なる遊牧民は實際に社會的の生活狀態の最下級に位するものにして蠻民中の蠻族なりき。彼等の外貌は獰猛にして其生活狀態と諸習慣は斯く野蠻なりと雖其心は極めて純白なるが故に一度基督の福音を知りたる時には、處女の如き彼等の心情は爲に燃え彼等は好んで基督教徒たるに到るや明なり。聖金口は實に此間の眞相を能く研究し宣教師を彼等に派遣したり。特に金口をして其宣教を急がせたる者は當時ゴート族の間に廣く信ぜられしアリイ教が此等の蠻族間に其手を漸く延さんとしつゝありたるが爲なり。幸にし

て聖金口の特派したる宣教師は好成績を收め府主教プオチイの記錄せるが如く金口約翰は眞の神の祭壇を嚮に人血を啜りたりし程の野蠻民の間に築きたりき。日夜乘馬と居を同じうせし勇猛なる民族も今や基督の十字架の前に跪くに至れり。聖金口は又君府に住居を占めたるゴート民にも宣教をなせり。彼等の多くは異教を奉ずる者なりしが中にはアリイ教の崇拜者もあり聖約翰は此等の者を均しく救濟せん事を慮りたり。彼ゴート族は希臘語を知らざるが故に聖金口は其傳道を容易ならしめん爲にゴート民の內より適當の人を選び、之を司祭及び輔祭の位に卽かしめ、異教人の出身なる聖徒保羅の名による會堂を建設し彼等をして土語を以て祈禱をなさしめ、其同族の間に基督教を布教せしめたるが金口は其のみにて滿足せず屢々自ら其奉神事に臨席し通譯を以て親しく彼教衆を教へたりき。

▲君府に於ける天變地妖

以上の如き聖金口の働きは非常の好成績を收め爲に君府一般の德義は尠からず高りたりと雖深く根ざせる惡癖は單に訓戒のみを以て矯正する事能はず世俗の慾望のみに耽る民衆を反省せしめんには手酷き神罰を要したりき而して斯くの如き神罰は實に一度ならず君府に落下したり其内にありて最も民衆に恐怖を與へたるは聖金口が大主教たりし初年に君府を襲ひたる地震なり當時生存せし歷史家の記錄の證明するが如く、四世紀代に於ては多くの地震ありたりと雖未だ嘗て此時の如く慘害を遺したる者あらざりき。實に地表は海の如く波立ち、家は潰倒し多數の人は壓死し之に加ふるに、ボスポラス海には海嘯起り此災害に乘じ惡漢は財物を掠め其罪跡を蔽はん爲に各所に放火

したり、民衆は實に驚愕全く度を失ひぬ、皇族は難を他地に避け君府内の秩序は殆ど想像すべからざる程に混亂したり、斯くの如く君府を擧げて驚愕混亂せる間に惟り聖金口は動ずる所なく其教權は消滅したる政府の權力を代理せる如き觀を呈したり、彼は混亂せる市に起ちて秩序の回復を計り驚愕せる民衆を鎭め市民が漸次市に歸り來り稍や落付きたる時彼は說教をなし燃ゆるが如き雄辯にて彼民衆の行へる不義不德の毫も今回の災害の慘害と擇ぶなきものなる事を說きたりき。聖金口は尙亦民衆の心を督勵する一方法として致命者の不朽體を君府より九里距りたるボスポラスの彼岸に新に建てられたる聖堂に移轉する渡御式を行ひぬ、同式は夜間擧行せられ民衆は手に燭を持ち嚴かに聖歌を謠ひ其嚴壯なる光景は非常の感動を與へ其式には聖金口の傳道によりて敬虔となり宗教に熱心となれる皇后エウドクシヤ

も亦參列したり、皇后の斯くの如き行爲たる、決して深くして眞面目なる宗教心より來れる者に非ざる事明なりと雖聖金口は設令や皇后の行爲が只表面許りなりとも都市の婦人界に及ぼす之が好影響を見て喜びを禁ずる事能はざりき。

▲教會特權の擁護

聖金口約翰は亦教會に附屬する諸特權の保護に對しても力を盡したり、教會が救贖事業に成功を收めんには此等の特權も亦大に必要なるにも拘らず當時の政府は此特權の剝奪を企てたり、而して斯くの如き企は多くの場合政府其者の意志よりも寧ろ一個有力なる個人の意志に基きたりき、教會の有する特權の内にありて最も重なる者は昔より教會の有せし「治外法權」なり、此「法權」の起源たる遠く舊約の時にあり當

時尙一個人の意志によりて「政治の行はれ屢々權力の濫用のある時代にありては各種の迫害と强迫を被りたる人の逃るゝ最後の避難所は實に教會内なる其聖壇の蔭なりき、弱き者虐げらるゝ者に對して常に其保護者たらん事を期せる聖約翰は教會の有する此避難所の特權に關しては特更重きを置き居たるが當時宮廷に在りて非常の權力を振ひたる一宮内官エウトロピイは己が權力を餘蘊なく振ひ其反對者を政府より遠けて帝位を恣にせんと謀り彼が憤怒せる者の常に教會内に避れ去るを見て教會の有する「治外法權」を改廢せんとせり、聖金口は此廢止に對して反對したるも其甲斐なかりき、然るに其廢止後間もなく再び教會の有する此特權を恢復すべき一事件こそ起りたれ、其は他に在らず久しく宮廷にありて權勢を恣にせしエウトロピイが專横過ぎて皇后をも侮蔑するに到りしかば此事皇帝の耳に入り爲に彼は激

烈なる皇帝の不興を被るに到れり、彼は即刻其官職を剝奪され剩へ死刑に處せられんとしたり、斯くなりては嚮に如何程權力を有したりし彼エウトロピイも施すに術なかりき、世を擧りて彼に助を與ふる者とては一人もなく其時迄虐げられし多くの者は却つて彼の落魄を見て手を打ちて喜び且つ多くの者の中には彼の此の如き悲境に際して豫て企みし復讐を想ふ儘になさんと考ふる者さへありき、今やエウトロピイの賴るべき所は只教會のみとなれり、彼は茲に於てか嘗て自ら廢止を企てたる教會の避難所に賴らんとし教會の聖壇の蔭に其一身を托したり、而して彼は實に其豫想せる所に的中し其身を避難所に寄せたるが爲に一命を取止めたり、聖金口は嚮に己を苦めたるにも拘らずエウトロピイの爲に避難所を備へ如何なる力も彼を捕ふる事能はざらしめたり、皇后は己を辱めたるエウトロピイに報ゆる所あらんとし

人を使して彼を捕へ極刑に處せん事を命せり、彼の命を受けたる使者は直にエウトロピイの避れたる教會に走り彼を捕んとしたるが其時約翰は斷乎として其追手の要求を退けエウトロピイの首級を得んと叫ぶ群衆に向つて宣て曰く「卿等にしてエウトロピイを殺さんとせば先づ余を殺して後之をなせよ」と金口は斯く語り了りて時宛も夜半たるに係らず直に宮中に參内して罪を得たるエウトロピイの爲に哀願をなし彼の命を助け夜の明くると共に群り集れる群衆に對して「宮內官エウトロピイに教ふ」と題する彼の有名なる說教をなし其內に於て人世に於ける名譽地位の空しき者なる事を驚くべき名句を以て畫き出せり。エウトロピイは其後遠島に處せられ刑を着たりと雖、其失意の瞬間に於ては聖金口の寬大なる度量は能く民の怒を解き法の所罰を免れしめたり。

▲金口の聖德叛軍を歸服せしむ

以上の如き偶然なる事件は計らずも君斯旦丁堡の主教の有する權力に一層の光を添へたり、聖金口の名は遠く彼の管轄外の教區に迄傳り他の教區より時に萬事に對し扶助をさへ願ひ來りぬ。小亞細亞地方に散在する教會は各種の紛擾の爲其教會內部の風紀著しく紊亂したり教會の長たるべき牧師の中には全く其任に堪へざる人あり。時には賂賄を以て主教座を贏ち得たる人あり、凡て斯くの如き不正行爲に對する改革の哀願の聖金口の許に達せし時、彼は己が所管教會の秩序を恢復したる經驗に基きて其隣の教區をも整理せん決心をなせり。彼は四百〇一年此目的の爲に小亞細亞に赴き秩序の亂れたる教會に留つて、斷乎たる處置を採り不正なる手段を以て聖職に就きたる者及び全く

其職に堪へざる主教數名を退職せしめ纔に三箇月の間に小亞細亞の秩序を恢復し、豫期の効果を收めて君府に歸れり久しく彼の說教を聞かざりし君府の教衆は渴する者の水を受くるが如き思を以て聖金口の歸來を迎へたり。然るに君府に於て彼の暫く不在なるに乘じて、面白からざる一事件こそ起りたれ、其はアリイ教徒等が大主教の不在を機とし頭を擡げんとしたる事なり。彼等の頭目たる者は當時有名なるゴト族の軍司令官ガイナなり、彼は君府政府の勢力が己の勳功に負ふ所大なるを賴み、皇帝に對し難題を提出したり。彼は實に皇帝に向ひて君府にある一會堂をアリイ教徒の爲に渡されん事を請ひたり。皇帝はゴト族が常に人に讓る所なき性質を知れるが故に彼等の要求を無下に却けたる曉には如何なる事の惹起せんかを危み其處置に迷ひたるが聖金口は皇帝に進言して其處置の途を教へ又自らゴト族に向ひ其要

求の不法なる事を指摘して一時彼等をして其要求を徹回せしめたり、此事件は其にて一先づ鎮靜したるも不德なるゴト族は間もなく此度は皇帝に對して反旗を飜し、四邊を掠奪し遂に君府に迫り來りたり。皇帝は全く當惑し意氣衰へ其なすべき所を知らず。宮內省の官吏は皆避けてガイナと談判をなしに行く者なかりき。此時に當りて聖金口は亦も起ち己の身に危害の來るをも恐れず毅然として叛軍の陣營に赴きたり。群衆は皆齊しく金口の身を危みたれども心靈の力は能く萬軍を征御し敵は王の使者として當時聲名ある聖金口の來れるを見て何等の反抗をもなさず皆默して聖金口に特別の敬意を拂ひぬ。約翰の交渉効を奏しガイナ其暴虐なる行爲を愼むに到りたれば、帝國も爲に恐るべき敵の侵略を免れたり。

▲聖金口群小の怨府となる

聖金口は到る處に於て正義の爲に能く戰ひ且つ惡行を遣責したる結果として其身に怨を受けたりき。蓋し彼金口は教會の內部なると其外部なるとを問はず、苟も一度不秩序及び不良の行と見たる者は假借する所なく斷乎たる處置に出でたれば、彼によりて主教座より免黜されたる多くの主教等は己が不法なる行を顧みる所なく却つて聖金口を甚だしく怨み凡そ人として出來得べき有ゆる方法を以て君府の教會の教衆を煽動し聖約翰を以て管轄外の教區に干涉し、人を遇する事殘忍なりと稱へて其排斥運動を開始したり。斯る約翰の排斥運動者の方には又平素より彼が令名を妬める主教等も加はりたるが其の中にありて人に知られたるはガワリヤの主教セベリアンなり。彼は聖金口が

小亞細亞の教會を巡回する時に當りて聖金口の代理として君府の教會を預りたるを好機とし君府に於て第二の金口たらんと考へ聖金口約翰を眞似たる口調を以て說教をなし巧に教衆を籠絡したり。彼の說教たるや恰も金鈴と銅羅の音の互に異れるが如く相異りたりと雖彼は教衆に媚び聖金口の如く其惡行を摘發して其を面責せざりしが故に一般教衆に彼の說教は歡迎せられたり。セベリアンは其親友の助を籍りて宮廷の内にも入り込み皇后に取入りたり。而して皇后は彼の言ふ所は聖金口と相反し巧に皇后に媚びたれば彼の說教は金口よりも皇后の氣に適ふに到れり。聖金口は都に歸り來りて此有樣を見直にセベリアンを都より遠ざけんとせしかども皇后の切なる懇願ありし爲に其をなさず斯くて聖金口に取りて危險なる敵手の一分子は宮廷に留るに至れり。聖金口の君府の大主教たるや在來の大主教のなせるが

如き華美なる招宴は之を全廢し地方より主教の來る事あるも彼等を饗應する事なかりしかば一般の主教をして其待遇の冷膽にして不親切なる如くに思はしめ爲に彼等も亦約翰排斥者の内に加はりたり。殊にビレヤの主教アカキイの如きは金口の冷遇に對して必ず報ゆる所あるべしとさへ激したりき。偶上京する地方の主教にして倘然りとせば常に君府に留り居れる都下の神品の不滿なるは敢て云ふ迄もなし。蓋し前任の大主教の時代に於ては彼等は何等の拘束をも受けざりしに反し聖金口は自ら司祭の職に長く有りて其勤務の模樣を知れるが故に彼等の行爲を親しく監督し其放埒を許さず各種の弊風を叱責すると共に彼等の修道女と同棲する惡風を嚴禁したれば彼等は非常の不滿を金口に對して有するに到れり。彼等は初めは只不滿の心をのみ有するに過ぎざりしも或時聖金口を祟拜せる性格極めて淡白なる一

長輔祭ゼラピオンが教會の一集會の席上にて聖金口に向ひ「閣下よ、彼等は聖杖の一擊を與へて、追放するに非ざれば反省する輩にあらず」と語りたるに此話端なくも導火線となりて遂に聖金口に對する主教の不滿は不平と反抗に化したり。神品職に在る者が特に約翰に對して不平を抱きたるは彼がオリンピアダの如き慈善家に對して神品職に金員を貢ぐ事を中止すべく忠告せる爲なり。約翰は斯くの如き行爲は徒に神品の濫費を助長せしむるに過ぎざることと爲し、之を禁遏したりと雖、神品職の側に就きて之を見れば聖約翰の此處置たるや彼等の收入を減じて恣に其慾望を滿足せしめ難くなりたる爲に非常なる不滿を惹起したり。彼等は啻に不滿を抱くのみならず、聖金口の此行爲を以て全く彼の貪慾なるが爲に凡の献金を己に掻き集むる主意に出でたる者となせり。斯くて聖金口に對する不滿の聲は修道士の假面を被り

て何等俗人と選ぶなき生活を市井の内に營まんとする僞善者の間に特に強くなりたり。斯る修道士は聖金口を以て傲慢にして殘忍なる僞善者なりと稱し、斯くて金口に對する惡言は讒謗を生み讒謗者は樣々なる惡評を市井に傳播せしめたり。其評たるや實に無稽のものにして、之を例せば金口が常に一人り食卓に就き嘗て先任の君府主教が行へるが如く他人を晩餐に招かざれば、これ金口は人と接するを喜ばず、其間には何等かの罪惡潜めるが如く風評せり。

▲金口の嚴正貴族の怨を買ふ

聖金口は曠野に於ける極端なる苦行の爲に甚しく胃傷を害せるが故に社交的の筵席より遠かれる事明かなるにも關らず如上の惡評は忽ちにして四方に傳播したり。教役者の金口に對する夫れ既に斯の如ん

ば嚮に聖金口の爲に教壇より嚴乎たる譴責を蒙りし首都の上流社會の金口を怨む度は更に甚しきものあり、彼等は金口を以て下級社會及貧民を煽動し上流及び富豪に反抗せしむるものと爲し、金口が常に富豪と會食するを避けて貧者病者困苦せる者負債ある者を友とせる事に對して殊に金口に慊焉たらず、更に上流の婦人社會に至ては約翰が屢々其華美の風を戒めし故に金口を憎む事甚しく、彼等は婦人の癖として金口の譴責の言を誇張して四方に傳播せしめたり。之が一例を擧ぐれば聖金口が彼等の華美なる風を責めて斯の如き奢侈を滿足せしめんが爲には其夫たるものは下民を掠奪せざる能はず、且つ彼等婦人等はイユザベリに倣つて化粧を爲し埃及の偶像に肖せて黛を施し自ら神より授られし己が姿を破壞せりと罵りたる時、婦人社會は此言を惡意に解釋し、これ確に貴族の婦人尙ほ進んでは皇后エウドクシヤ陛

下の事を意味したるものと爲し、非常に誇張して之を皇后に奏上するに至れり、斯る讒誣と中傷は皇后の約翰に對する信任を冷かならしめざる事能はず。蓋し事實に於て皇后は極端なる虛榮家にして、また利己主義の者たりしが故に平素よりして金口の說教の中に己を責むる點あるを痛切に感じ居たるなり。皇后は當時に於る華美の風の源泉にして彼の華美は君府の上流社會を風靡して夫に倣はしめ多大の害毒を世に流したり。

▲金口の排斥運動起る

今や聖金口の四周には惡聲と怨恨と讒誣の雲積み重り早晩何等かの破裂を爲すべき模樣となれり。金口は此事に關して知らざるに非ざれども、己の義なるが爲に凡てを神の攝理に委ねて敵の讒誣に對して何

等の注意をも拂はざりき。然るに彼の敵は彼を陷るゝ事を怠らず其味方として遂に其當時斯界に勢力を有せし所の教役者アレキサンドリヤのセオヒルをも引入るゝに至れり。セオヒルは當時の基督教世界に在りて富と勢力を並び有する教役者なりしが其資性傲慢にして權勢を好み、首府の主教座に對し躊躇して野心を持てる者なりき。是より先き主府の主教ネツクラリイ歿して首都の主教座の空位となるや彼は同座を占めんと欲したるが其希望の不成功に終るや、彼は己が勢力範圍の者を其位に就かしめ竊に其者の手を通して首府の教界に權勢を揮はんと企てたり。されば彼は聖金口約翰の選擧に對しては盛に反對を試み且つ其叙聖式に參列するを拒絶したりと雖も、元來約翰の選擧たるや政府の意に出でたるものなるが故に彼も政府の力に壓せられて遂には約翰の叙聖に同意せざるを得ざりしも其時よりして彼は實に金

口の仇敵となり歴山市より常に猜忌の眼を以て君府に行はるゝ凡ての事に注意するを怠らざりき。而して金口が教會政治上成功して萬事を整理せしを聞ける時には流石はセオヒルは頗る快からざりしが、今首府に於て約翰に對し不滿の聲起り金口の宮廷に於ける信任も亦薄くなりしを聞くに及んで彼は甚だ滿足したり。されば彼は早晩一事件の約翰の身上に生ずべきを察すると共に其事件が彼の干渉を經すしては經過する事なきを信じ事件の發生の早からんことを一日千秋の思を以て歸待したり。其後間もなくニトルヤの曠野に居れる數名の敬虔なる修道士の身に起りたる不幸事が端なくも原因となりてセネヒルをして其野心を滿足せしむる好機會を捉へしめたり。嘗にも記すが如くニトルヤの曠野は原野修道の風の開始せられし當初より修道士等の好んで住居せし土地にして、其地には祈禱と苦行とを事とする多

くの苦行者常に在住したるが此等の苦行者の中に敬虔と學識を以て秀でたる四人の兄弟あり。彼等は身長の著しく高かりしが故に「背高兄弟」と綽名せらる始めセオヒルは彼等兄弟に對して尊敬を拂ひ其中の二人をして司祭の職を與へて歷山市に勤務せしめたるが、彼等兄弟は苦行者の特性たる單純として無垢なる心より大主教セオヒルの行ふ不正行爲を看過し難く一日彼を面責して後都を去るべき事をセオヒルに申出でたるに彼は非常に激怒し、彼等兄弟を罵りて彼等はオリゲン教を奉じ居たりと誣言したり。當時オリゲン教は主教の最も警戒せる所にして其教を排斥する爲には正教の多くの熱心家の奮起せる所にしてキプリヤのエピファニイの如きは殊に此僞教を絶滅するが爲に自らパレスチナに赴きたる程なり。セオヒルは敢て斯の如き熱心を有するに非ざりしかども彼は斯るオリゲン教に對する迫害を利用する

時には彼の有する多くの敵の融和上最も力あるを思ひ常に其迫害を試みたるなり。彼セオヒルは「背高兄弟」に對し此の迫害をなしたるのみに滿足せず、尙其管下なる主教の集會を開きて「背高兄弟」を曠野に邪教を傳播する異端者なりと宣告せしめたり。此と同時に彼は尙其異端の巢窟を根本的に絶滅せしめんと企て遂にニトリヤの修道院の破壞を命じたり。而して此破壞の時多くの修道士等は此に反抗したる爲に打擲及び傷害を蒙り建物迄も破壞及び燒却せられたり。此時「背高兄弟」は辛うじて迫害の及ばざる深野の中に逃れ同じく難を避けし他の修道士等と共に遙に涙を以て煙を揚げつゝある前の住宅を顧みて嘆息したり。斯の如くにして彼等は全く賴る處なく爲すべき仕事も亦失ひ加ふるにセオヒルの管下に居る事能ざるが故に隊を組みて始はイエルサリムに赴き次には君府に行き憐み深き大主教金口に保護を請ひ、其

手に依つて皇帝に哀願せんと志したり。聖金口は彼等を快く迎へ彼等の爲に皇帝に代願すべき事を約したるも當時教會には一の主教が他の主教の管轄の事に關し容喙する事を禁せし規則ありたるが故に金口は事のオリゲン教に關したる爲め特に如上の規則を嚴密に遵奉し迫害せられし修道士を助くる前に事の詳細を明に知らんと欲しセオヒルに懇篤なる手紙を認め如何なる方法を以てしてか悲境にある修道士等と事を平和に解決すべき希望を通じたり。然るに驕傲なるセオヒルは此手紙を見て直に自分を侮辱したるものと考へ金口に對し無禮なる返書を送りたり。然るに一方「背高兄弟」は聖金口の往再決せざるを見て堪へ難くなり直接皇帝に哀願せんとし一哀願書を認め其中に口を極めてセオヒルの罪惡と殘忍なる行爲を記したり。されば今やセオヒルは皇帝の命により教會裁判に附せられざるべからざる場合と

なれり。若し約翰にして此時教會裁判の裁判長たるを承諾したらばセオヒルは所罰を免がれざりしや明なりと雖も彼は幸運にも金口が教會内に紛擾と僞教のあるを危み此裁判長たるを辭し、唯セオヒルに向つて同答を求めたるに止めたりしかば何等の所罰をも受けざりき。然るに一方歴山市の府主教セオヒルは事の始終を直に解し既に久しき以前より快らざる約翰に此機會を逸せず平素の怨恨を雪ぎ彼を首都の主教座より排斥し了りて其場所に己が腹心の者を立て再び今の如き教會裁判に召喚さるゝ如き事を將來に除き置かんと決心せり。斯くて彼は直に其事に對する運動方法を計畫せり。即ち彼の企みは約翰を異端者とする事にして聖金口約翰が教會より排斥されたるオリゲン教の遵奉者なる「背高兄弟」を保護するは之れ彼が自らオリゲン教徒たる所以にして既に異端者たる以上は帝都の主教たる資格なき者なり

と言はんと考へ斯く狡猾に計畫されたる隱謀を以て驚くべき程機敏に活動を開始したり卽ち彼を先づ己が配下の者を指揮して帝都に居る約翰の敵を煽動し遂にはキープルのエピファニイの如き名聲ある教役者をも約翰の敵として立たしむるに至れり

▲金口異端者を以て目せらる

セオヒルはオリゲン教と始終戰ひ居れるエピファニイの熱心を知れるより彼は言巧みにエピファニーを唆かし、今やオリゲンの異端は教會の心臟を貫き大主教たる約翰に依て君府の主教座をも襲ひたれば正教の危機は目前に迫れりと稱せり。好人物にして正直なる此老教役者エピファニーは彼の言に驚き高齡なるにも拘らず此の如き異端を除かんが爲に自ら君府に赴く事を己が義務と考へたり。されど彼は不

幸にして事の眞相を調査する爲に約翰と先づ親しく會見する事の順序たるを悟らず他の言を以て直に金口を異端者なりと思ひ込み金口と普通の會見をも爲さゞるのみならず、彼は君府に程遠からぬ一會堂に赴き、奉神禮を行ひ且つ教會規則の命ずる所に反し土地の主教たる金口の同意をも得ず恣に輔祭の叙聖式をさへ行ひたり。帝室に於て皇后より非常の尊敬を蒙りつゝあるエピファニイは一個人の家に窃に留まり聖金口と何等の交渉をも爲さず、突如として嚴なる神事の時にオリゲン教徒の大破門を行はんと決心し其、破門者の中に金口をも加へたり。然るに斯の如き事を知れる約翰は非常に悲しみ、彼は百方力を盡して此老主教を宥めんとし、且つ彼は破門の如き大事を何等嚴密なる調査を爲さずして漫りに行ふ事の不可なる所以を説明したり。されば、エピファニイも之が爲に其心稍々動きたるに彼は又多數の者より

して約翰が熱烈の信仰を持ち、善行あり、又惡癖なき生活を營める人なるを聞きたるに加へて、嚮に耳にしたる風説は少しく異りたる所あるを認め如何にすべきか自ら惑ひ始めたり之より先き皇后エウドクシャは曩に約翰が君府の上流社會に蔓延せる奢侈の風と罪惡と利己主義とを屈々として責めたるに對し不快の念を持ちたるに、恰も此時一寡婦より其所有に係る葡萄畑を没收せんとせる事の約翰の關渉の爲に不成功に終れるより一層の怨を加へ來れり。皇后は實に彼の不義なるイエリザベリの如く一寡婦の持てる葡萄畑を羨み夫を取上げんとしたるが其時寡婦は涙片手に約翰の許に保護を請ひしより、金口はイリヤの如く恐るゝ處なく皇后の慾望に反抗し自ら宮廷に赴き憐むべき寡婦の爲に哀願を爲したり。斯くて金口が爲せる哀願も皇后に反省を與

ふる所とならず反て金口を宮廷より放逐せしめし結果となるや、約翰は蹶然として起ち先づ皇后の教會に參詣する事を禁止し、且つイリヤとイエリザベリの事に關する一説教を試みたり。此説教は聽衆に深き感動を與へ何人も説教中のイエリザベリなる者が皇后エウドクシャを指せるものなる事を解したり。約翰の爲せる此説教が皇后の耳に入りたる時には彼の憤怒は非常の者にして直に約翰を放逐せんと考へエピファニイを宮廷に呼び皇后は巧言と威嚇を以て彼に迫り、約翰を異端者と爲して直に大主教座より排斥すべき手段を講ずべきを請ひたり。而してエピファニイが容易く其命を用ゐず斯の如き大事を爲すには豫め事を調査すべきものなる事を上奏したる時にはエウドクシヤは激怒と憤懣の爲に殆ど狂者の如くなり、若しエピファニイにして

約翰の放逐を肯せざれば皇后自ら教會を離れて異教に投じ其を都に引込み多くの者を異教に從はしめて基督教會に對し有ゆる迫害を加ふべしと嚇したり、エピファニイは皇后の斯く憤怒せるを見且つ實際皇后が斯の如き迫害を爲し兼ねまじきを認め寧ろ斯くの如くんばオリゲン教の調査を止めて己が教會に歸るを可なりとし旅裝を整へ直に歸途に就きたり。然るに不幸にしてエピファニイは其歸途に於て遽かに永眠したり。

▲金口の敵者の惡計

歴山市のセオヒルは始終注意して此等の事件を傍觀し、彼の手下に賄賂と說得とを以て約翰に對する不滿を煽動したり。セオヒルは今彼の味方に皇后が就き其目的を達する爲には如何なる支出をも厭はざる

風あるを知りて非常に狂喜したり。實に皇后の宮殿は約翰に對する議訴者と敵に對し公開せられ其宮殿は僞善と掠奪と無智なる豪奢と破廉恥なる行爲とをなせる者の集會所となり日々約翰に反抗する計畫を議し彼の排斥と誣告とをてれ事としたり。皇帝アルカジイは凡て此等の事實を知らざるにあらず、彼は亦聖金口を敬愛し彼に對して起れる惡計を悲まざるにはあらざりしかども、其意志薄弱にして萬事決斷を缺き、且其皇后の執拗なるを知れるより、何事をも知らざる者の如く裝ひ沈默を守るを上策と考へたり。されば今や萬事はセオヒルの手中に收められ、彼は萬計既に成れりと考へ、自ら君府に赴かんとせり彼は今や嚮の日と異り彼告人としてに非ずして、却て無罪なる主教を陷れんとする裁判官として上京の途に上らんとす、彼が斯く上京の志を定めたるは皇后エウドクシヤより直に君斯旦丁堡に來れとの書を落手

したる爲なり。皇后は記して曰く「我身親しく陛下に對し卿の事を奏上すべく又卿の反對者の口をも遮らしむべし、さらば速に成るべく多くの主教を引連れ來りて我が敵なる約翰を追放せよ」と。セオヒルは己が事の成功せるに安じ賜物とすべき夥多の寶物を積める船に乘つて都に向ひたり。彼は印度の香料と珍貴なる菜果と高價なる埃及の絹及び金絲織等を携へ是に由て己が富を都人士に示し又之を以て顯官の買收を企たるなり。セオヒルは降生四百三年の八月海路君斯旦丁堡に著したるが同市の埠頭には多くの手下と夫等に買收せられし遊民共夥しく來りて彼を迎へたり。皇帝は彼の來れるを知りたりと雖も彼を引見するを欲せざりき然に之に反し皇后エウドクシヤは彼の到着を喜び窃に宮殿に彼を引見し速に其企てたる事業に著手すべきを命じたり。斯くて皇后の意に依りセオヒルは約翰の罪を問ふべき主教集會を

開かんと決したるも斯る不正なる集會は之を君府内に開くは極めて危險にして萬事に不便なるが故に彼等は之を君府と海峽を隔てゝ相對する亞細亞側なるハルキドン市に開催するに決せり。蓋しハルキドンの主教キーリンは埃及の出身にしてセオヒルの親戚に當り彼の同主義者なれば其事に對し多大の便宜を有すセオヒルは集會を開く爲に要する主教の滯在費は無論のこと其他萬般の用意を整へ居たれば集會は容易くハルキドン市に開催を見たり。

▲聖金口孤島に放たる

此不法なる集會に參列したる主教は二十有三名にして集會は殆と約翰の讒訴者を以て滿ち、彼等は恣に全世界の善教師にして正義を以て聞ゆる金口を裁判せんとし先きに不正行爲の爲め職務を金口より免

せられ又は罰せられし輔祭又は修道士等を招き其口述を聞取りて之を材料として二十九箇條の「審問書」を作り、之を約翰の許に送附し其辯解の爲自ら金口が集會に出席し來るべきを求めたり。金口は彼の敵の惡謀が成功しつゝあるを見て悲みたると共に又嘗て被告の地位に立ちたるセオヒルが今は其地位を代へ己の裁判官たりしを寧ろ奇怪に感じたり。されば聖金口は一日己に同主義なる四十餘名の主教を集めて彼等に感動すべき一説教を爲し述べて曰く「兄弟よ、我が爲に神に祈禱せよ。若し卿等にして基督を愛するならば卿等は力めて其教會を去る事勿れ。我が目前には已に不幸近づき、我は今數多の悲みを受けて此生活を去らざるを得ず、視よ、「サタナ」は我が教を厭ひ、我に對し集會を開けり。されど卿等は我が身上に就きて悲むを止め希くは卿等の祈禱の中に我が事を紀念せよ」と。此感動すべき説教を聞ける管下の主教は非

常に驚き、彼等は悉く流涕したれば約翰は彼等を慰め、而して後己が執るべき計畫を決し遂にハルキドンの集會を以て何等の權限をも有せざる者と見做し、集會の招きに應せず其出席を拒絶したり。ハルキドンの集會の會員は聖金口の出席拒絶を見て非常に憤慨し約翰より答を携へて使者として來れる主教及び司祭を亂打し約翰に加へんとして豫め準備せし鐵製の足枷を彼等に施し、然る後更に新なる僞證者を買收し其口述を取りて無垢なる金口に對し缺席裁判を加へたり。此時金口は會堂に立ち沈着なる態度にて己が身に振り掛りつゝある不幸を顧み毅然として語つて曰く「海は如何に怒り涙立つとも巖を破壞する事能はず、涙は如何に荒るゝとも耶蘇の船を沈沒せしむるを得ず。我等の畏るべきはそも何物ぞ。死か、否、我が生るは基督の爲にして死するは其收穫の如し、追放か、否、全地は主の者にして彼は全世界に彌漫し居れ

り財産の没收か、否、我等は此世に何物をも携へ來らず。去る時も亦何物をも携へ行く事を得ざるに非ずや。我無一物なるも恐れず、富も願はざれば死にも戰かず、唯我が唯一の願は卿等が善事に進まん事なり。斯る說敎は實に義人の衷心より出づる外には出で得ざる所にして、其生涯は基督を中心と爲し居るを以て敵の如何なる攻擊をも恐れざるなり。

セオヒルの開ける不法の集會は約翰をして遂に出席せしむるを得ず爲に止むなく缺席を以て判決し了らんとし、各種の議訴を基とし、形式的に三十三箇條の條目を作り是に由て約翰を主敎座より免黜せらるべき者と爲し、其決議を齎して皇帝に允許を請へり。小膽なる皇帝は皇后が平素より斯る惡謀に耽り居たるを知れるより、若今齎し來れる集會の決議を承諾せざる場合には如何なる椿事の出來するやも計られずと危み、寧ろ此際金口を犧牲にするを上策なりと思ひ、遂に決議に允

許を與へ約翰追放の命を下したり。されば兵士は直に約翰の許に至り其命令の執行に著手したり。如上の風評一度市街に響き亘るや群衆は非常に激昂し隊を組み其愛する大主敎を保護せんと犇めき來り、爲に軍隊と人民との間に今や流血の慘事を見る形勢を呈し來りたれば、罪なくして罰せられたるに相違なきも約翰は此光景を見て無益の騷擾を市に起し多大の犧牲を造くるを望まず、卽ち自ら己が住宅を窃に出でゝ進んで軍隊の手に渡り兵士は直に彼を波止場に伴ひ行き船に乘せてニコミジヤの近傍なるプレネトに追放したり。

▲聖金口再び都に迎へらる

以上の如き事件は夜間行はれしを以て何人も覺る者なかりしが翌朝に至り群衆は初て平素親愛する金口が追放されしを知り市中は割る

るが如き騒擾を釀し、市街に於て之が爭鬪及び激論始まりて或者は負傷し或者は殺され市街は鼎の沸くが如く、教會堂は無論の事市の廣場に於ても到る處約翰を判決したる決議の不法を叫びたる路傍演說を爲すを見たり。而して群衆中には斯の如き事件の發頭人たる歷山市のセオヒルは宜く撲殺すべしなど喚く者もあり、實に其時の形勢より推察すればセオヒルが若し此危險を惧れ市より窃に遁れ出でざりせば慥に彼の殺されたるや明なり。群衆はセオヒルの既に遁れ去りて其怒りを報ゆる術なきを知り直に隊を組みて宮廷に迫り喊聲と號泣を以て速に約翰を復歸せらるべきを哀訴したり。此恐るべき光景を耳にしたる皇后エウドクシヤの狼狽は一方ならず、されど彼は斯る光景を一時の者にて長く繼續すべきものにあらず、疾風の如く忽に過ぎ去るべきものと考へ、自ら慰めたるも其心中は甚だ安からず、其爲せる所を少

しく悔み始めたり。皇后の心斯の如く動搖し始めたる時しも恐るべき地震偶々君府に起りたるより、爲に皇后は聖者を苦めし神罰の來れるに非ずやと思ひ驚怖の餘り殆ど其度を失ひ彼は卽刻皇帝に願ひて其發したる勅令を廢し約翰の復歸を懇願するに至れり。而して皇帝が其願を容るゝや皇帝エウドクシヤは直に約翰に自ら一書を認め速に都に歸ることを請ひ且つ己が行ひし事を辯解し、其所爲は己自身の考へに非ずして惡者の敎唆に出でたりと書したり。皇后より派遣されし使節は此の如き手紙と皇帝の勅命とを携へて四方に飛び金口の行方を搜したるが其使者の一人なる宮內官吏ウリソンは漸く金口がプレネトに滯在し居れるを確め其地に赴きて金口に面し速に君府に歸り非常に興奮しつゝある皇后の心を安むべきを懇願したり。然るに聖金口は此時既に前日蒙りたる凡ての痛苦を忘れ居たれば直に承諾して君

府に歸京したるが群衆は彼の歸京を聞き海岸は無論の事無數の小舟に乘つてボスポル海に浮び其敬愛する金口の歸京を迎へたり。初め金口は先づ歸京に先ち主教の集會を開きハルキドンの會議に於て決せられし判決の取消を望みたりと雖も群衆は斯る形式を欲せず、強て約翰を携へて嚴かなる行列を組み喜び勇み彼を會堂の教壇に連れ來りて彼を高座に座せしめたり。金口は心身非常に疲れ感情平隱ならざりしと雖も彼は此時默するを得ず極めて短きも力ある一説教を試み其中に彼は中心より萬人を惠ませ給ふ神に感謝し又其管下の民が己を愛する斯く大なる事に對し歡喜措く能はざる旨を述べたり、群衆は彼の説教を聞きて狂喜し而して約翰の敵は群衆の斯る樣を見て失望して四方に遁れ去りたり

▲金口と皇后と再度の衝突

聖金口約翰は神の慈愛と群衆の愛慕とに依りて元の地位に復歸し且つ新に開かれたる六十五人の主教の會議に依り其正しきを認められ復前日の如く基督の教務に從事し元の如く日々黃金にも似たる教話を試むるを得るに至れり。されば教會は再び元の如き平靜に歸りたりと雖も其平和は不幸にして再び長く續かず蓋し約翰の敵は一時其失敗の爲閉塞せしとは云へ其心中は前日以上金口を怨み再び金口に酬ゆる期の早く來らんことを待ちたり。彼等は約翰の口より出づる譴責の言の身に取りて頗る苦痛なるのみならず又金口の正しき生活は彼等の殆ど忍び難き目隙りとなれり。第二回目に於て約翰を排斥する主動者となれる者は再び皇后エウドクシヤなりき。彼は嚮の日に蒙りた

る恐れと惑を早や忘れて再び金口に對し怨を蓄へ始めたり。蓋し皇后は約翰の歸京せる後些少も前日の非を改めず依然奢侈と專横とに耽り居れるが爲に聖金口と皇后との衝突は約翰の君府に歸りたる儘に二箇月後に於て復も左の如き事に依りて生じたり。皇后エウドクシヤは皇帝アルカジイの小膳者なる爲め國家の最上主權は己によりて左右せらるゝものなりと考へ、其名譽心を滿足せしめんが爲に皇后としては未だ曾て其事のありしを聞かざる己の銀像を市街の重要地點なるソフィヤ聖堂の側に建設せんとしたり。斯の如きエウドクシヤの未聞なる非望は西羅馬帝國にも亦響き亘りたれば皇帝ゴノリイは甚しく激昂し斯る古例を破る如き行爲を中止せしめんと兄弟アルカジイに對し勸告をなしたり。されどエウドクシヤは義兄の勸告に些少の耳も假さず其計畫を逐行し斯くて頂上にエウドクシヤの銀像を戴ける記

念塔の間もなく成るや有ゆる儀式と祭禮とを以て其建設式を擧行したり。銀像の建設地は會堂に近接し居たれば異教の儀式を以て行はる盛大なる建設式は騷がしく教會の神事を妨ぐる事甚しく而し其祭禮は數日間繼續したるが故に約翰は此を以て教會に對し故意に企てられし侮辱なりと考へざる能はず。されば金口は初め縣知事を以て此瀆神的行爲を除かんとせしも縣知事が何等爲すべき方法を執らざるを見て彼は斷乎たる一場の譴責の說教を爲したり。該說教は歷史上其說教中にある下の如き名句に由て其題號を付せらる、曰く『イロデアダは亦も狂氣し騷ぎ拍手し踊り狂ひて授洗約翰の首級は再び捜索せらる』と約翰の敵は此言を聞き皇后に注進するを怠らざりき彼等は此說教中のイロデアダを以て皇后を指せるものなりと解釋したればエウドクシヤは其注進を聞き非常に激怒し流涕して其受けし所謂「辱め」を

皇帝に訴へて再び會議を開催して惡むべき約翰の退位を爲すべきを哀願したり。之と同時に一方皇后は再び書をセオヒルに遣し直に彼が君府に來りて約翰の退位を行ふべきを懇願せり。此手紙に接せしセオヒルの喜は言ふまでもなき事にして彼は己が平素の希望の再び成れるを以て直に其命に從はんと考へしと雖も、曩の日に危く市民の爲に石擊に逢はんとしたる苦き經驗は彼をして少時躊躇せしめ自ら再び窮地に赴くを欲せず、己が代理として三人の主教を派遣するに決し其代理者に對し約翰に宣告すべき諸方策を授けたり。彼は實に嘗てアリイ教徒が大アファナシイに對して作れる一規則を適用し約翰の在位の不法なるを責めて退位を宣告せんとしたるなり。其規則なるものは則ち左の如きものなり「曰く、一度會議に依りて退位の宣告を受けし主教は前回の會議よりも更に大なる會議の決議を經るに非ざれば位に復

する事能はず」と斯の如き規定は正教會の立てたる規則に非ずしてアリイ教の設けし規則なるが故に之を約翰に適用するの不法なる事は言ふまでもなく、且つ嚮にも記せる如く約翰は既に六十五名の主教にて開かれし會議に依りハルキドンの決議の無効なるを決議せられたるが故に何等の理由なしと雖も彼セオヒルは此外に約翰を退位せしむる理由を發見せず、即ち曩に派遣せられし三人の主教をしてハルキドンに會議を開かしめ再び約翰の在位は教會の規則に反則なりと稱へ之に皇帝の允許を奏上したり。

▲金口に對する再度の迫害

斯の如くにして再び約翰の頭上には暗雲起りて彼は皇帝より退位の命令を受くるに至れり。皇帝アルカジイは前回の經驗に鑑み暴力を以

て金口を追放する事の危險なるを思ひ彼に對し力を極めて既に金口が大主教に非ずして其職に就きたる事の不法なるを說き自由に其主教座を去らしめんと欲したり、されば降生四百〇三年の降誕祭に於て皇帝は先づ金口より聖餐を領くるを拒絕し而して復活祭に至るも金口の問題の尙ほ解決せざるを見るやエウドクシヤに依りて敎唆されたる皇帝は遂に復活祭を一期として斷乎たる處置に出でんとし約翰に對し敎會を退く嚴命を發したり、自ら省みて何等疚しき點なき約翰は皇帝の嚴命に對しても救世主基督に依り彼に委任されたる敎會を恣に棄つる其責任を自ら引き受くる事を好まず。されば暴力を以て予を追はゞ其責任は予を放逐する者の責任たれば敢て己が關する所に非ずと同答をしたり。皇帝は金口の同答を聞き心稍々動搖したるもエウドクシヤに惑されし彼は如何にもして速に此紛擾を片付んと欲し宮

內官マーリンに命じて止むなく暴力を以て約翰を放逐せしめんとせり。されば宮內官は降生四百〇四年四月の十六日の復活祭の日に於て三千人の洗禮を約翰が行はんとしつゝある會堂に兵士を差向けたり。異敎人にして隊長たるルーチオに率ゐられし半野獸的なる兵士は暴力を以て會堂內に闖入し掠奪と暴擧を恣にし敎衆を容赦なく威赫したり。彼の聖金口を防禦せんとしたる者は悉く打擲せられ司祭は會堂より逐はれて半ば裸體になりて今や洗禮を領けんとしつゝありたる者は市に突出されて聖壇は褻され聖器物は皆掠奪せられたり。彼等は斯く暴行を行ひたる後至聖所に迄闖入し非常に悲み居れる聖金口を用捨なく捕へて之を主敎の私宅に監禁したり。金口は實に此私宅內に設けられし監倉に約二箇月間起居したるが、金口に對する形勢は日に惡しく彼は繩に祈禱を以て己を慰め多くの從者中金口の爲に保護者

たりし者は僅に一女輔祭オリシピアダあるのみなりき。金口は四邊に於て何等頼むべき人なきに依り手紙を以て西羅馬帝國の名聲ある主教たる「パパ」インノケンテイ一世、メジオランの大主教ウエネリイ、アクウレイのプロマチイに對し審に事情を具し今の境遇を訴へたり。金口より手紙を受けし主教等は彼に對し等しく同情を寄せたるも彼の敵の力を畏れて助力を與ふる能はず。然るに一方金口の敵は益々暴威を逞し、主教館の四周は遂には暴漢と危險人物のみを以て圍まるゝに至り彼等の内には金口の生命に對してさへ危害を加へんとする者あり、或時の如き主教館の入口に於て金口を保護せる市民一人の佯狂者を捕縛したるに彼は懐中に短刀を藏し持ち其を以て金口を刺さんとした る事を自白せり、又一日非常に遽しく主教館に走り込む一人の奴隷ありしを以て館内の守衛其者を呼止たるに凶漢は短刀を閃かして守衛

を斬付け更に傍に居て大聲に助を呼びたる其者をも斬り又手にて彼の凶手を支へんとしたる者も亦負傷したり。されば館内は上へ下へと混雜し兇漢を捕へんと犇めきたるが奴隷は血汐の滴たる短刀を揮ひて彼を追來る市民を追拂ひつゝ逃走し、而して彼の路に當つて偶々浴場より出でたる人兇漢の逃走を見て夫を捕へんとしたるに彼は一擊の下に短刀を以て致命傷を與へ更に逃走したるが兇漢は遂に力盡きて間もなく市民に捕へられたり。捕縛の後彼が自白せし所に依れば彼は實に約翰を殺す爲に五百金の賄賂を受け居たりと云へり。市民も此事件後金口の身の上を非常に憂慮し其私宅を嚴重に警衛したり。然る に金口を己が爲に斯る椿事の出來したるを悲み前回の如く遂に自由に敵の手に渡る事を最も平和なる策となし己の親近者に對し事情を說得し彼等が正教の信仰に堅固ならん事を勸め彼等に最後の接吻を